

綾歌町内遺跡発掘調査報告書

第 8 集

平成 15 年度国庫補助事業報告書
快天山古墳

2004. 3

綾歌町教育委員会

はじめに

我が綾歌町には、縄文時代晩期以降の各時代に先人の手によって築かれた文化遺産が数多く残されています。中でも弥生時代後半期から古墳時代前半期にかけては、近年の発掘調査によって、かなり密度の高い内容であることが確認されています。これら開発事業等に伴って発掘調査された様々な遺跡について、更に調査研究を重ね、古代の生活等を明らかにするとともに、遺跡の保護・活用を図り、永く後世に伝えることは、私達に課せられた使命であると考えます。

綾歌町教育委員会では、平成8年度から国庫補助ならびに県費補助によって綾歌町内遺跡発掘調査事業を実施しており、今年度についても、当事業に取り組み、実施した調査成果として、この報告書を発刊することになりました。

今年度は、一昨年度及び昨年度に引き続いて、前期古墳として四国を代表する快天山古墳の確認調査を実施し、これまでに実施されている調査成果の補足とするとともに、快天山古墳の本格的調査に向けた基礎調査としました。快天山古墳は、国内最古の刳拔式割竹形石棺を3基保有しています。規模的にも前期古墳としては四国最大であり、本古墳の内容解明が香川県の古墳形成時期の社会背景を解明する手がかりになると考えています。

これからも、我が綾歌町に所在する貴重な文化遺産を、後世に伝えていくためにも、調査の成果が貴重な資料として活用されることを望みつつ、当事業の継続的な実施を予定しております。

最後になりましたが、これらの調査に当たりましてご理解とご指導をいただきました関係各位、また調査にご協力とご援助をいただいた方々に厚くお礼を申し上げます。

平成16年3月31日

綾歌町教育委員会教育長 土岐道憲

例 言

1. 本書は、綾歌町教育委員会が平成15年度国庫補助事業として実施した、綾歌町内遺跡発掘調査の概要報告書である。
2. 今回の遺跡発掘調査は、快天山古墳を対象とした。
3. 快天山古墳の試掘調査、遺物整理及び実測については、綾歌町教育委員会主任主事近藤武司、徳島文理大学助教授大久保徹也氏が分担して行った。主に15・16・17トレンチに関するものは大久保が中心に、18・19・20トレンチに関するものは近藤が中心に全ての作業を進めた。
4. 本書の執筆は、第Ⅱ章第3～5節は大久保が、その他は近藤が行った。尚、全体の調整は近藤が行った。
5. 本書の実測図の縮尺は、すべてスケールで表示した。また遺構実測図中の方位は、国土座標第Ⅳ系による方位で示した。
6. 出土遺物及び図面は、綾歌町教育委員会に保管している。
7. 快天山古墳試掘調査・墳丘確認調査にあたっては、以下の方々のご指導・ご協力を得た。ここに記して謝意を表する。
大久保徹也（徳島文理大学助教授）、丹羽佑一（香川大学教育学部教授）、小林謙一（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所文化財情報研究室長）、渡部明夫（香川県埋蔵文化財調査センター次長）、國木健司（香川県教育委員会事務局高校教育課指導主事）、片桐孝浩（香川県教育委員会事務局文化行政課主任）、松本和彦（前同主任技師）、加納裕之（香川県埋蔵文化財調査センター調査技術員）、園木裕美、宮地舞子、白木亨、堤徹也、中村茂央（徳島文理大学学生）
8. 挿図については、国土地理院の25,000分の1地形図を調整した綾歌町管内図（承認番号 四複第134号）及び綾歌町航空測量図を使用した。

目次

本文目次

第Ⅰ章 平成15年度綾歌町内遺跡発掘調査事業概要	1
第Ⅱ章 快天山古墳確認調査	4
第1節 快天山古墳の立地と環境（第2図）	4
1. 立地と環境	4
2. 快天山古墳の現況	6
第2節 調査の経緯	6
1. 本年度調査の意図（第3・4図）	6
2. 調査の経過	8
第3節 くびれ部調査区の概要	9
1. 15トレンチ：くびれ部西面（第5図 写真1）	9
2. 16トレンチ：くびれ部東面（第6図 写真2）	11
3. 17トレンチ：後円部北東斜面上位（第7図 写真3）	12
第4節 くびれ部調査区出土遺物の概要	14
1. 快天山古墳関係遺物（第8～14図 表1 写真4～8）	14
第5節 平成14年度調査成果補遺	22
1. 3トレンチ拡張部（第15図）	22
2. 14トレンチ（第16図）	25
第6節 後円部調査区の概要	30
1. 18トレンチ：後円部南西面（第20図 写真9）	30
2. 19トレンチ：後円部南東面（第21図 写真10）	34
3. 20トレンチ：後円部南西面（第22図 写真11）	36
第7節 後円部調査区出土遺物の概要	37
1. 快天山古墳関係遺物（第23図 写真12）	37
第8節 まとめ	39
1. 快天山古墳の規模について	39
2. 墳丘外表施設の状況	40
3. 快天山古墳の築造時期	41
第Ⅲ章 まとめ	54

挿 図 目 次

第1図	平成15年度綾歌町内遺跡発掘調査事業対象地	3
第2図	快天山古墳と周辺の弥生後期～古墳中期主要墳墓 (S=1/50000)	5
第3図	くびれ部調査区配置図	7
第4図	後円部調査区配置図 (S=1/400)	8
第5図	15トレンチ平・断面図 (S=1/60)	10
第6図	16トレンチ平・断面図 (S=1/40)	11
第7図	17トレンチ平・断面図 (S=1/40)	13
第8図	壺形埴輪 (S=1/4)	15
第9図	円筒埴輪1 (S=1/4)	17
第10図	円筒埴輪2 (S=1/4)	18
第11図	円筒埴輪3 (S=1/4)	19
第12図	円筒埴輪4 (S=1/4)	20
第13図	円筒埴輪5 (S=1/4)	21
第14図	円筒埴輪6 (S=1/4)	22
第15図	3トレンチ平・断面図 (S=1/60)	24
第16図	4トレンチ平・断面図 (S=1/60)	26
第17図	快天山古墳調査区配置図	28
第18図	快天山古墳段築・埴輪復元推定図 (前方部)	29
第19図	前方部東面調査区平面図	29
第20図	18トレンチ平・断面図 (S=1/60)	32
第21図	19トレンチ平・断面図 (S=1/60)	35
第22図	20トレンチ平・断面図 (S=1/60)	37
第23図	壺形・円筒埴輪 (S=1/4)	38

表 目 次

表1	遺物観察表	27
----	-------	----

図版目次

写真1 15トレンチ

図版1	推定第二段テラス遺物出土状態（西から）	42
図版2	推定第二段テラス遺物出土状態（東から）	42
図版3	第二段テラス遺物出土状態（西から）	42
図版4	第三段斜面葺石遺存状態（西から）	42
図版5	第二段斜面葺石（西から）	42
図版6	第二段斜面葺石と基底石掘方？	42
図版7	第二段斜面葺石（南から）	42
図版8	第二段斜面葺石（上から）	42

写真2 16トレンチ

図版9	第三段斜面葺石残存状態（東から）	43
図版10	第三段斜面葺石（北から）	43
図版11	第三段斜面葺石（東から）	43
図版12	第三段斜面葺石（南から）	43
図版13	推定第二段テラス遺物出土状態（東から）	43
図版14	第二段テラス遺物出土状況（西から）	43
図版15	第二段テラス遺物出土状況（東から）	43
図版16	第二段テラス遺物出土状況（南から）	43

写真3 17トレンチおよび調査風景

図版17	17トレンチ全景（東から）	44
図版18	17トレンチ南壁土層全景（北東から）	44
図版19	南壁土層：中央部（北から）	44
図版20	南壁土層：西部（北から）	44
図版21	南壁土層：東部（北から）	44
図版22	17トレンチ遺物検出作業	44
図版23	17トレンチ葺石実測作業	44
図版24	調査説明会風景	44

写真4 15トレンチ出土埴輪

図版25	壺形埴輪（第8図-1）	45
図版26	壺形埴輪（第8図-2）表	45
図版27	壺形埴輪（第8図-2）裏	45
図版28	円筒埴輪口縁部（第9図-2）表	45
図版29	円筒埴輪口縁部（第9図-2）裏	45
図版30	円筒埴輪口縁部（第9図-5）表	45
図版31	円筒埴輪口縁部（第9図-5）裏	45

図版 3 2	円筒埴輪中位 (第 1 2 図- 2) 表	4 5
図版 3 3	円筒埴輪中位 (第 1 2 図- 2) 裏	4 5
写真 5 1 5 トレンチ出土埴輪 2		
図版 3 4	円筒埴輪中位 (第 1 3 図- 1) 表	4 6
図版 3 5	円筒埴輪中位 (第 1 3 図- 1) 裏	4 6
図版 3 6	円筒埴輪中位 (第 1 1 図- 3) 表	4 6
図版 3 7	円筒埴輪中位 (第 1 1 図- 3) 裏	4 6
図版 3 8	円筒埴輪中位 (第 1 2 図- 4) 表	4 6
図版 3 9	円筒埴輪中位 (第 1 2 図- 4) 裏	4 6
図版 4 0	円筒埴輪中位 (第 1 2 図- 4) 拡大	4 6
写真 6 1 5 トレンチ出土埴輪 3		
図版 4 1	円筒埴輪中位 (第 1 0 図- 4) 表	4 7
図版 4 2	円筒埴輪中位 (第 1 0 図- 4) 裏	4 7
図版 4 3	円筒埴輪中位 表	4 7
図版 4 4	円筒埴輪中位 裏	4 7
図版 4 5	円筒埴輪基底部 (第 1 4 図- 1) 表	4 7
図版 4 6	円筒埴輪基底部 (第 1 4 図- 1) 裏	4 7
図版 4 7	円筒埴輪基底部 (第 1 4 図- 4) 表	4 7
図版 4 8	円筒埴輪基底部 (第 1 4 図- 4) 裏	4 7
写真 7 1 6 トレンチ出土埴輪 1		
図版 4 9	円筒埴輪口縁部 (第 9 図- 1) 表	4 8
図版 5 0	円筒埴輪口縁部 (第 9 図- 1) 裏	4 8
図版 5 1	円筒埴輪口縁部 (第 9 図- 3) 表	4 8
図版 5 2	円筒埴輪口縁部 (第 9 図- 3) 裏	4 8
図版 5 2	円筒埴輪口縁部 (第 9 図- 4) 表	4 8
図版 5 4	円筒埴輪口縁部 (第 9 図- 4) 裏	4 8
図版 5 5	円筒埴輪口縁部 (第 9 図- 6) 表	4 8
図版 5 6	円筒埴輪口縁部 (第 9 図- 6) 裏	4 8
写真 8 1 6 トレンチ出土埴輪 2		
図版 5 7	円筒埴輪中位 (第 1 0 図- 3) 表	4 9
図版 5 8	円筒埴輪中位 (第 1 0 図- 3) 裏	4 9
図版 5 9	円筒埴輪中位 (第 1 1 図- 4) 表	4 9
図版 6 0	円筒埴輪中位 (第 1 1 図- 4) 裏	4 9
図版 6 1	壺形埴輪底部：穿孔部 (第 8 図- 5) 表	4 9
図版 6 2	壺形埴輪底部：穿孔部 (第 8 図- 5) 断面	4 9
図版 6 3	壺形埴輪底部：穿孔部 (第 8 図- 5) 裏	4 9
写真 9 1 8 トレンチ		
図版 6 4	作業風景	5 0
図版 6 5	置土検出状況 (北西から)	5 0

図版 6 6	置土検出状況（西から）	5 0
図版 6 7	盛土確認状況（西から）	5 0
図版 6 8	盛土確認状況（北西から）	5 0
図版 6 9	盛土検出状況（西から）	5 0
図版 7 0	埴輪裾付壙？検出状況（南西から）	5 0
図版 7 1	土壌検出状況（北西から）	5 0
写真 1 0 1 9 トレンチ		
図版 7 2	埴端付近から埴頂を望む（南東から）	5 1
図版 7 3	トレンチ全景（北東から）	5 1
図版 7 4	トレンチ全景（東から）	5 1
図版 7 5	推定テラス付近確認状況（南から）	5 1
図版 7 6	埴輪裾付壙？検出状況（南から）	5 1
図版 7 7	埴輪裾付壙？完掘状況（南から）	5 1
図版 7 8	埴輪裾付壙？検出状況（南西から）	5 1
写真 1 1 2 0 トレンチ		
図版 7 9	出土遺物検出状況（北東から）	5 2
図版 8 0	礫等堆積状況（北東から）	5 2
図版 8 1	土壌検出状況（南東から）	5 2
図版 8 2	土壌堆積状況（南から）	5 2
図版 8 3	南東壁土層堆積状況（西から）	5 2
図版 8 4	南東壁土層堆積状況（北から）	5 2
図版 8 5	北西壁土層堆積状況（東から）	5 2
図版 8 6	北西壁土層堆積状況（南から）	5 2
写真 1 2 各トレンチ出土埴輪		
図版 8 7	1 8 トレンチ円筒埴輪中位（第 2 3 図－1）	5 3
図版 8 8	1 8 トレンチ円筒埴輪口縁部（第 2 3 図－2）	5 3
図版 8 9	1 8 トレンチ円筒埴輪中位（第 2 3 図－3）	5 3
図版 9 0	1 8 トレンチ円筒埴輪中位（第 2 3 図－4）	5 3
図版 9 1	1 8 トレンチ壺形埴輪口縁部（第 2 3 図－5）	5 3
図版 9 2	1 9 トレンチ円筒埴輪中位（第 2 3 図－6）	5 3
図版 9 3	2 0 トレンチ円筒埴輪中位（第 2 3 図－7）	5 3

第 I 章 平成 15 年度綾歌町内遺跡発掘調査事業概要

平成 8 年度から国庫及び県費補助金によって、綾歌町内に所在する遺跡の確認調査を実施しており、今年度についても同事業を継続して実施することになった。

国庫補助金申請については、平成 15 年 4 月 10 日付けで提出し、平成 15 年 5 月 30 日付けで交付決定を受けた。

県費補助金申請についても、同じく平成 15 年 4 月 10 日付けで提出し、平成 15 年 5 月 30 日付けで交付決定を受けた。

今年度については、栗熊東字若狭及び富熊字畑田に所在する快天山古墳の墳丘確認調査を実施した。

快天山古墳は、昭和 25 年香川県教育委員会が発掘調査を実施し、その内容は、『香川県史跡名勝天然記念物調査報告 第 15 快天山古墳発掘調査報告書』（昭和 26 年）に記載されている。さらに、昭和 26 年京都大学考古学教室が再調査を実施しており、その内容は、『岩崎山第 4 号古墳・快天山古墳発掘調査報告書』（平成 14 年）に記載されている。

快天山古墳は、その主体部を中心とした内容が全国的に見ても非常に重要な性格であるにもかかわらず、特段の保護措置がなされていなかった。近年になり地元の保存及び保護に対する活動が活発になってきており、平成 11 年 2 月 5 日付けで綾歌町史跡として指定を受けることとなった。

町教委としては、快天山古墳が町指定史跡となったことで文化財保護における網掛けはできたと考えているが、より良い保存及び活用に向けた整備を進めるためにはできる限り早い時期に土地の公有化を図ることが先決であると考えており、町指定のみならず上位指定を受けるのが適当であるとの判断から、これまで不確定であった墳丘の形状及びその規模、また構造についての確認をするための調査を一昨年度から実施することとした。

調査方法は、墳丘の規模形状を確認するために、まず平板による地形測量を一昨年度実施した。その基礎資料を基に、検討した箇所に試掘トレンチを順次設定した。

昨年度までの調査によって、快天山古墳の西側前方部のくびれ部付近では葺石とテラス面を、また、そのテラス面には樹立した円筒埴輪を確認することができた。更に、東側くびれ部でも前方部側に 3 段の葺石とその間のテラス面を、また、そのテラス面では 3、4 メートル間隔で樹立する円筒埴輪列が確認できた。基底段の葺石基底石は後円部側に進むにつれ東への広がりを見せることからくびれ部屈曲点と考えられる。

また、後円部の南先端部及び西側での調査では、現存する施設は確認できなかったが、墳裾と考えられる地山の傾斜変換点が確認できた。

更に、前方部西斜面では、1・2 段目の葺石列とその間のテラス部に樹立する円筒埴輪を検出した。

今年度の調査では、西側くびれ部の確認と後円部の規模及び構造を確認するための調査を実施した。この結果、後円部は大半が後世の開墾等によって、表面部に改変を受けており明確な施設の確認ができないことが分かった。しかし、10m 余りに及ぶ墳丘高の上半

部が盛土で構築されていることが確認できた。

また、くびれ部の調査で2段目テラス面とその上部斜面の葺石を確認することができ、後円部に向けて曲がりを見せることから、くびれ部屈曲点と捉えることができる。

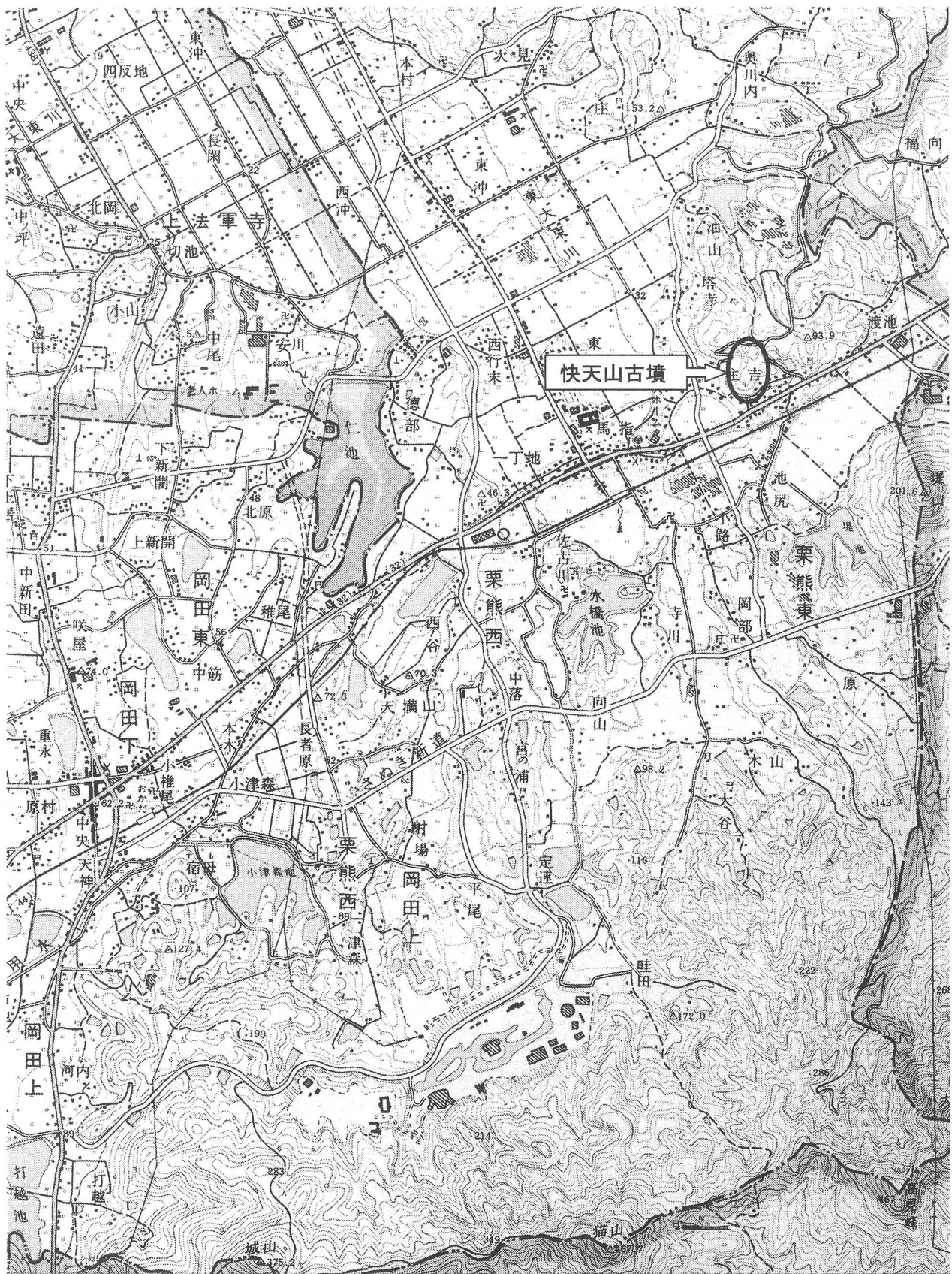
これらのことを総合して考えると、快天山古墳は墳丘長98.8m、後円部は南北長軸径68m、東西短軸径63.5m、前方部は長さ35.6m、くびれ部幅32.5m、最大墳丘高10.8mの前方後円墳であることが判明した。

構造としては、少なくとも前方部に円筒埴輪を立て並べたテラスが存在し、その斜面部には葺石が敷き詰められていることが確認された。また、地山削り出しによって大半の形状が整えられるが、部分的な置土による整形や後円部の上半部は盛土で構築されていることも確認された。昭和に行われた調査の内容と併せて考えると、快天山古墳の築造時期については古墳時代前期後半で、当時の前方後円墳としては四国最大規模を誇るものであることが確定された。

以上、町内1箇所を発掘調査を実施し、掘削による調査総面積は79.4㎡であった。

平成15年度の町内遺跡発掘調査事業は、平成15年4月1日より実施し、平成16年3月31日に終了した。

第1図 平成15年度綾歌町内遺跡発掘調査事業対象地



快 天 山 古 墳

第Ⅱ章 快天山古墳確認調査

調査対象地	綾歌町栗熊東字若狭・富熊字畑田
調査期間	平成15年6月23日～平成15年8月31日
調査面積	79.4㎡

第1節 快天山古墳の立地と環境（第2図）

1. 立地と環境

快天山古墳は北緯34° 13' 57"、東経133° 53' 30"に位置する。四国北東部の讃岐地域は、燧灘に面した三豊平野、備讃瀬戸に面して東西に並ぶ高松平野・丸亀平野、および播磨灘に面した東部海岸平野群と後背内陸平地群から成り立つが、快天山古墳はこのうち丸亀平野の南部に所在する。平野東縁を画する城山・横山山塊最南端の丘陵上にあつて、大束川、綾川のほぼ分水界に位置する。山塊の南縁は細かく開析され小丘陵が手指状に並ぶが、本古墳はそうした丘陵先端部の一つを利用して築かれた大形の前方後円墳である。

東方の綾川水系上流域に広がる羽床盆地に対する眺望は堤山等に遮られその一部を垣間見るに過ぎないが、南～西方向の視界は概ね開け、大束川上流域の栗熊・富熊地域から岡田台地一帯を広く見渡すことができる。

古墳は後円部を南、すなわち丘陵先端に向け、前方部を北に向ける。後円部頂は標高75.4mを測り、周囲の水田面との比高はおよそ40mで、南方の平地側からは後円部の圧倒的な質感を仰ぎ見ることができる。

北方の横山山塊の高所には、横山経塚、奥川内、陣の丸、地神山といった古墳群が分布する。このうち横山経塚古墳群は少なくとも2基の前方後円墳を含む積石墳墓群である。

また、陣の丸古墳群では2基、奥川内古墳群では1基の盛土前方後円墳を含む。これらの前方後円墳はいずれも軸長40m以下で立地等から古墳時代前期に遡ると見られ、快天山古墳に先行する可能性が高い。地神山古墳群は中期後半～後期前半に下ると見られ、小型前方後円墳を含むというが、その内容は未だ報告されていない。

これに対して丘陵南縁にはより劣位の無壇石箱式石棺もしくは小型古墳が散在する。快天山古墳に近接した尾根伝いの北方約100mの地点には、安山岩板石で構築した精美的な竪穴石槨を中心主体とする墳形・規模不詳の薬師山古墳がかつて存在した。東隣尾根先端の住吉神社背後からは箱式石棺が見つまっている。これらに関する情報は乏しいが、その多くは中期前半以前に比定しうるものと見られる。さらに快天山古墳前方部に接して5基の箱式石棺群が開墾時に確認されており、うち一基から小型倭製鏡が出土している。また後円部南斜面の開墾時にも硬玉製勾玉の出土が伝えられており、位置関係からこれらは本墳に従属する埋葬群と位置づけられる可能性が高い。

また栗熊低地を挟んで南方の高見峰山麓には小型前方後円墳を含む石塚山墳墓群・平尾墳墓群や、定連池東丘古墳群・畦田古墳群・休場池東丘古墳群・原竜王山古墳群などの複数の小規模墳墓・古墳群が分布する。これらの形成は古墳時代前期を中心とし、定連遺跡、平尾墳墓群のように始点が弥生後期に遡るものを含む。現時点では横山山塊の墳墓群より



- | | | | | |
|--------------|------------|-------------|--------------|-----------|
| 1. 快天山古墳 | 2. 薬師山古墳 | 3. 住吉神社山頂古墳 | 4. 横山経塚古墳群 | 5. 横峰古墳群 |
| 6. 奥川内古墳群 | 7. 陣の丸古墳群 | 8. 地神山古墳群 | 9. 城山古墳群 | 10. 津頭西古墳 |
| 11. 津頭東古墳 | 12. 石塚山古墳群 | 13. 原竜王山古墳群 | 14. 休場池東丘古墳群 | 15. 定連遺跡 |
| 16. 定連池東丘古墳群 | 17. 平尾墳墓群 | 18. 岡田万塚古墳群 | | |

第2図 快天山古墳と周辺の弥生後期～古墳中期主要墳墓（S=1/50000）

形成開始が早いようであるが、やはり中期後半以降には継続しないようだ。

中期後半～後期前半の墳墓群は羽床盆地縁辺部と岡田台地に集中し、横山山塊・大高見峰北麓では希薄となる。羽床盆地では段丘縁辺部に円墳が群集し、その中には津頭東・津頭西・末則古墳などの規模・装備の点で他を圧倒するものも認められる。また最近になって3基の小型前方後円墳が確認されており、少なくとも内一基はこの時期に位置づけられる可能性が高い。津頭東古墳の築造が前期に遡るものの、大多数は中期後半から後期前半の所産となる。同様に岡田台地でもその時期に車塚古墳を盟主とする万塚古墳群が形成される。

後期後半段階には、宇間神社古墳などの横穴式石室墳が再び大高見峰北麓に築かれるが、大規模な群集は認められない。

いずれにしても快天山古墳に匹敵する傑出した規模の墳墓は、その前後には認められな

い。また、快天山古墳の築造時期に小型前方後円墳の築造が停止し、以後も円墳が主体となる点は注意しておく必要があるだろう。

2. 快天山古墳の現況

快天山古墳背後の丘陵一帯は1970年代に大規模な農地開発の対象となり、その影響は残念ながら本墳前方部まで及んでいる。この部分では尾根頂部が削平開墾されると共に農道整備と養鶏場の設置で前方部の中程が切断され、この折に前方部に接した箱式石棺群も滅失したとされる。農道西側の前方部側面は厚い建設残土の堆積に覆われていたが、町教育委員会によって除去された。

また、近年では丘陵西裾に新興住宅地が広がっており、墳丘から旧地形が残っている区域に隣接するところまで開発が進んでいる。しかし、墳頂には本古墳の名称の謂れとなった旧田福寺の僧侶快天以下の墓石が並び、後円部南斜面に住吉神社御旅所が設けられていることもあって、後円部からくびれ部は戦前から戦後の一時期にかけて畑地化されたものの、現在は山林に覆われ、前方部ほどの極端な改変を蒙っていない。

後円部東から南斜面の広い範囲は墳頂平坦面に接する部分まで、かつて開墾されて細かな畝の痕跡が整然と並ぶ。また墳丘裾付近は連続的に切り込まれ、やはり畑地を造成した形跡が残る。西斜面では同様の痕跡は顕著ではないが、上半部の随所に土砂崩落痕跡が認められ、畑地化していない分墳丘の自然崩壊が目につく。後円部斜面のこうした状況に比べ、東西両側面ともにくびれ部から前方部南半部は最も本来的な形状が保たれているようだ。

第2節 調査の経緯

1. 本年度調査の意図（第3・4図）

一昨年度、平板測量を実施したうえで、墳丘規模の確認を主目的とした墳丘主軸上の2地点（前方部北端と後円部南端）にトレンチを設定した。また合わせて後円部と前方部西面で墳端位置の確認を試みた。その結果、後円部南端の調査（4・5トレンチ）では畑地開墾によって墳裾部が既に失われており、地形および開墾状況から間接的に墳端位置を類推することを余儀なくされた。また、前方部前端の調査（1・6トレンチ）では区画溝の設定を反映する材料は得たものの畑地利用時の攪乱が激しく、確定的とは言い難い状況であった。しかし、前方部西側面の調査（2トレンチ）では斜面葺石と樹立埴輪などを検出し、墳端位置を推し量る重要なデータが得られた。後円部西面の調査（3トレンチ）についても墳丘の自然崩壊が著しかったものの地山成形の痕跡と崩落した葺石の状況などから一定の推測が可能となった。

これらの結果を補足するため、昨年度は再度、前方部前端での調査（7・8トレンチ）を行い、1・6トレンチで検出した区画溝に連続すると考えられる浅い溝遺構が確認された。その東側面（9トレンチ）と前方部頂部（10トレンチ）での調査では、畑地への改変によって思わしい成果は見られなかった。

また、墳丘構造・外表施設の状況の確認調査として、一昨年度2トレンチでかなり良好な状況で葺石と埴輪列の遺存が確認されていることから、見かけ上、後円部ほど墳丘斜面

が開墾された形跡が少ない前方部のくびれ部付近で期待を寄せて調査（11・12・13トレンチ）を実施した。この結果、墳端を含む3段の斜面とその間のテラス面が確認できた。各段の斜面部には、大半が脱落しているものの葺石が葺かれており、テラス面には3～4m間隔で円筒埴輪が立て並べられていることが確認できた。葺石最下段と円筒埴輪列は、南に進むに連れ東に広がりを見せ始めることからくびれ部の屈曲点と捉えることができた。

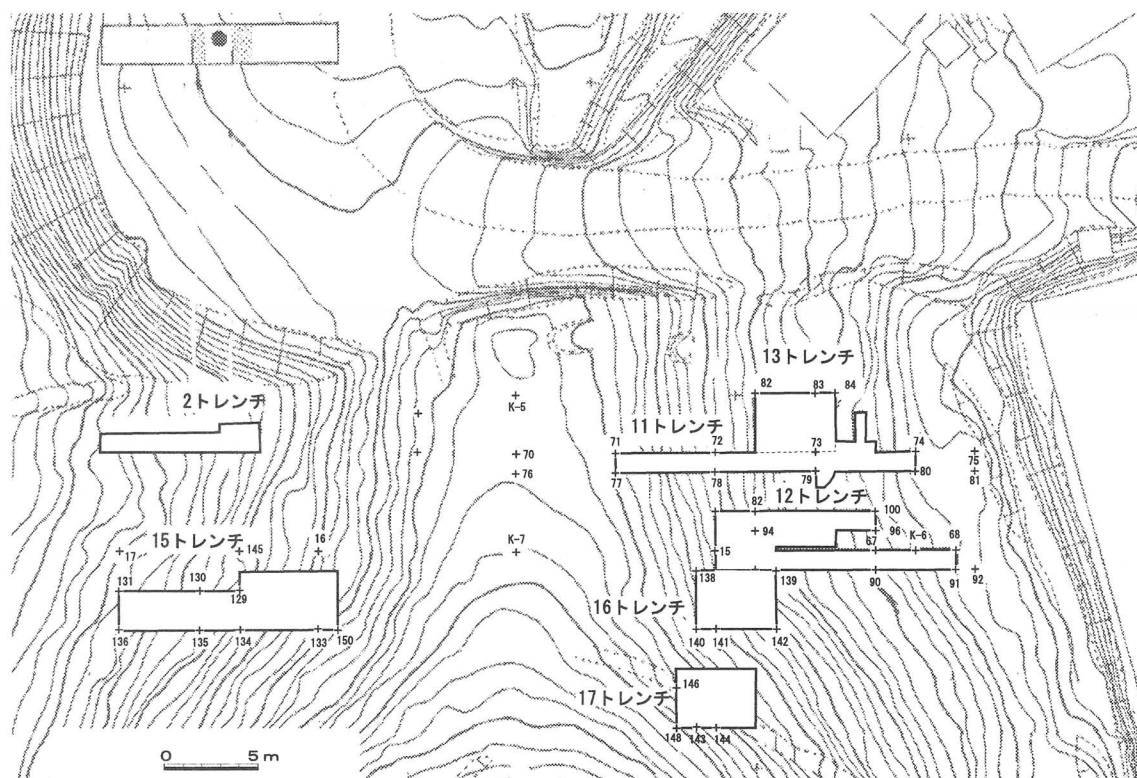
更に、3トレンチを墳頂に向け大規模に確認調査を実施したことで、明確な外表施設は確認できなかったが墳丘構造として盛土で構築されている部位があることが確認できた。

また、前方部西側に盛られていた大量の建設残土を除去したことによって可能となった前方部西側面での調査（14トレンチ）では、2段の葺石列とその間に円筒埴輪の樹立したテラス部が確認できた。

このような昨年度までの調査成果を承けて、今年度の調査では更に資料を拡充するために以下のポイントについての検討・調査を実施することとした。

まず1つ目は、昨年度、東側前方部くびれ部付近で墳端及び屈曲点を確認できたことや段築に伴う外表施設が確認できたことから、西側でも同様に残存していることを想定した確認調査である。

2つ目は、東側くびれ部の構造を明瞭にするため最下段の屈曲点を確認した11～13トレンチの南側での確認調査である。

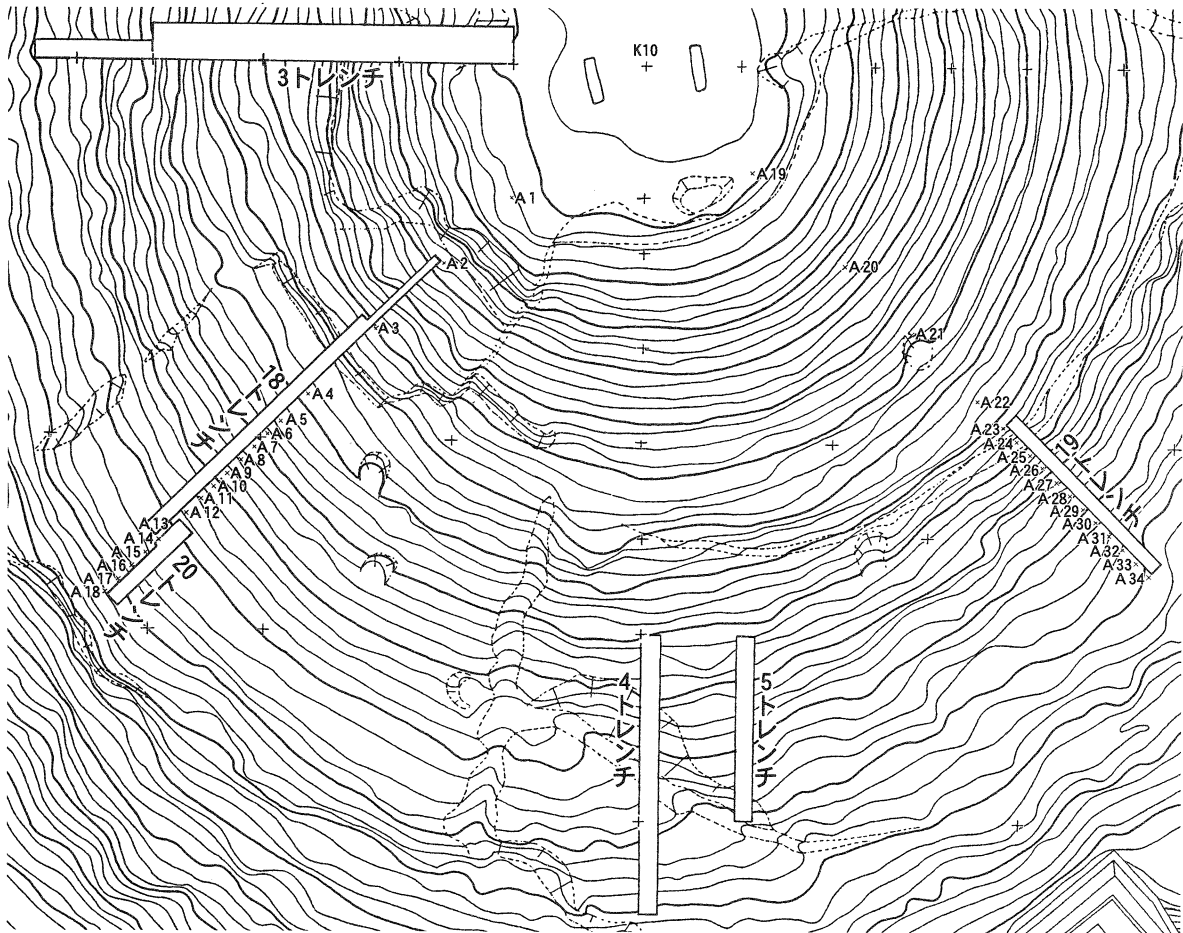


第3図 くびれ部調査区配置図

3つ目は、快天山古墳は丘陵先端部に後円部を平野に向けた立地となっており、昨年度の東側くびれ部付近の調査成果から想定すると前方部と比較して後円部は段築の3段目が著しく腰高になることが推測できる。そこで、後円部が4段になる可能性を考え、後円部

北東部での確認調査を実施した。

4つ目は、後円部の南半部は、現況や昨年度までの調査成果から、現状の快天山古墳の中でも特に改変を受け残存状況の良くない部位と考えられるが、僅かな期待を最大限に膨らませて墳丘主軸から東西それぞれに45度振った方向で墳端確認を含めた確認調査である。



第4図 後円部調査区配置図 (S=1/400)

2. 調査の経過

今年度の調査は、夏季に集中しての実施とした。一昨年度から継続して実施してきた確認調査も今年度の調査成果までで一段落つける予定での計画であったため、後半期は、その整理作業期間とした。

6月下旬頃から現地確認等の準備作業を進め、本格的な掘削作業は7月に入ってからとなった。

調査箇所は、上記のとおり検討したポイントについて確認するため、15～20トレンチと6本の試掘トレンチを設定した。

トレンチナンバーは、西側くびれ部を15トレンチ、東側くびれ部を16トレンチ、後円部北東部を17トレンチ、後円部南西部を18トレンチ、後円部南東部を19トレンチとした。18トレンチについては、調査中の検討により下方に延長することとしたが、大木により拡張が妨げられているため、南側に並行する20トレンチを追加した。

昨年度に引き続き調査協力を得ることになった徳島文理大学大久保徹也氏との協議の結果、少し遅れて15～17トレンチの調査の応援をしてもらえることとなったので、先に

18 トレンチから掘削作業に入った。途中からは、大久保氏や徳島文理大学の学生諸氏も参加し、6本のトレンチを一部拡張したりしながら併行して作業を進めていった。

また、調査の最終段階頃には、恒例により現地説明会を開催した。200人程の参加者を得て盛況であった。

第3節 くびれ部調査区の概要

1. 15 トレンチ：くびれ部西面（第5図 写真1）

設定の意図：一昨年調査の2トレンチおよび昨年調査の14トレンチで検出していた前方部西側面の段築・葺石との関係に留意しつつ、くびれ部西面の構造を確認することを目的として設定し、調査を行った。

設定位置：2トレンチの推定第二段斜面葺石基底ライン、14トレンチの第一・第二段斜面葺石基底ラインの検出位置を考慮し、かつ現状の見かけ上のくびれ部位置と東面11・12・13トレンチの所見を勘案して設定した。くびれ部における第一・第二段斜面基底ライン屈折部の確認を期待したものである。地点と規模は墳丘主軸想定ラインと直行方向、すなわち2・14トレンチに併行して主軸推定ライン上のK7杭の西9m南1mを東北隅として東西延長11mとなる。当初幅2mで設定したが、調査進行中に葺石などの検出状況に応じて東半5m部分については幅3mに拡張した。このため、本トレンチの最終的な調査面積は27㎡となる。なおもっとも後円部頂に近いトレンチ南東隅の地表高7.1m弱、西北隅では約6.6mと調査区全体で5mの比高がある。

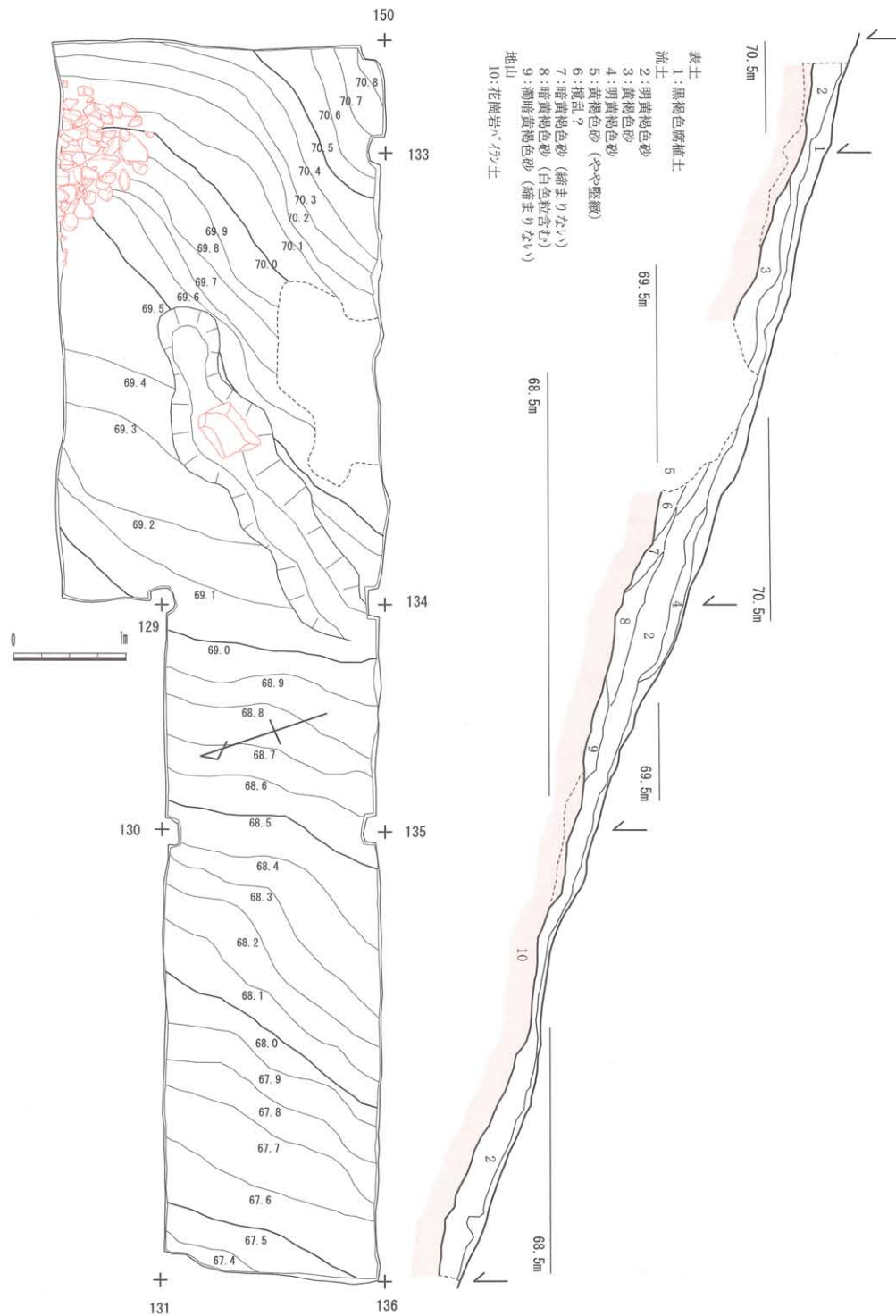
成果：トレンチ西半部の延長6m分、標高6.9m以下の部分は1950年調査の報告で埴輪列の存在を指摘している地点に接するが、すでに緩やかに連続する斜面に均されている。形状から畑地が開墾されたものと見られる。このため、期待した第一・第二段斜面葺石や下段テラスはすでに削平され、痕跡もとどめない。この部分では地山直上まで比較的近年に堆積したと見られる締まりのない粗砂が続き、その間に若干の埴輪片と葺石材を検出しただけである。したがってこの地点で墳丘裾を確認することはできなかった。

調査区東半部では上段テラスの一部と、第三段斜面くびれ部の屈曲点と思われる部位を確認した。上段テラスは現状では標高6.9～6.9.4mに位置し最大幅1.4mが残存する。しかしその下端は上に述べた改変部に接するので、本来の規模を示すとは言い切れない。テラスは後円部墳丘に沿うように緩く弧を描きながら北東-南西にトレンチを斜行しつつ延びる。テラス上面には第三段斜面から崩落した葺石材が分厚く堆積し、比較的大型の埴輪片多数が混在する。一部は上段テラスに樹立されたものであろうが、転落石の上位に折り重なる破片も多いので後円部頂部・上位を含めて斜面上方から流入した破片も混在すると推測する。この地点で原位置に樹立された円筒埴輪の痕跡は確認していない。

さて、第三段斜面葺石は調査区北縁から延長0.9m最大幅1mがかろうじて残存していた。配列と位置関係から前方部斜面側の葺石と推測されるものである。周辺の形状からちょうどこの残存葺石が欠落する箇所が後円部との屈折部に相当するだろう。連続する後円部斜面側では葺石はほぼ完全に脱落していた。なお葺石の脱落した上段テラスと後円部斜面の境に緩く弧を描いて連続する不定形で浅い掘り込みを検出した。樹根攪乱の可能性も完全には否定できないが、検出した落ち込みの中程に、葺石基底石に似つかわしい辺5

0 cm大の大型石材がはまり込む。これを原位置と見なせば連続する浅い掘り込みは葺石基底列の掘方と推測することも可能である。

前方部側斜面に残存する葺石は高さ0.7 m分最大8段分が観察される。上位部分が位置をとどめながらもテラスに接する基底部分は脱落している。残部は標高69.5 m～70.2 mの位置にある。拳大～人頭大の垂円礫を不揃いに組み、現状の勾配は33度と他部位よりかなり傾斜がきつい。もっとも局所的な検出であるのでこの勾配置を積極的に評価することは難しいだろう。

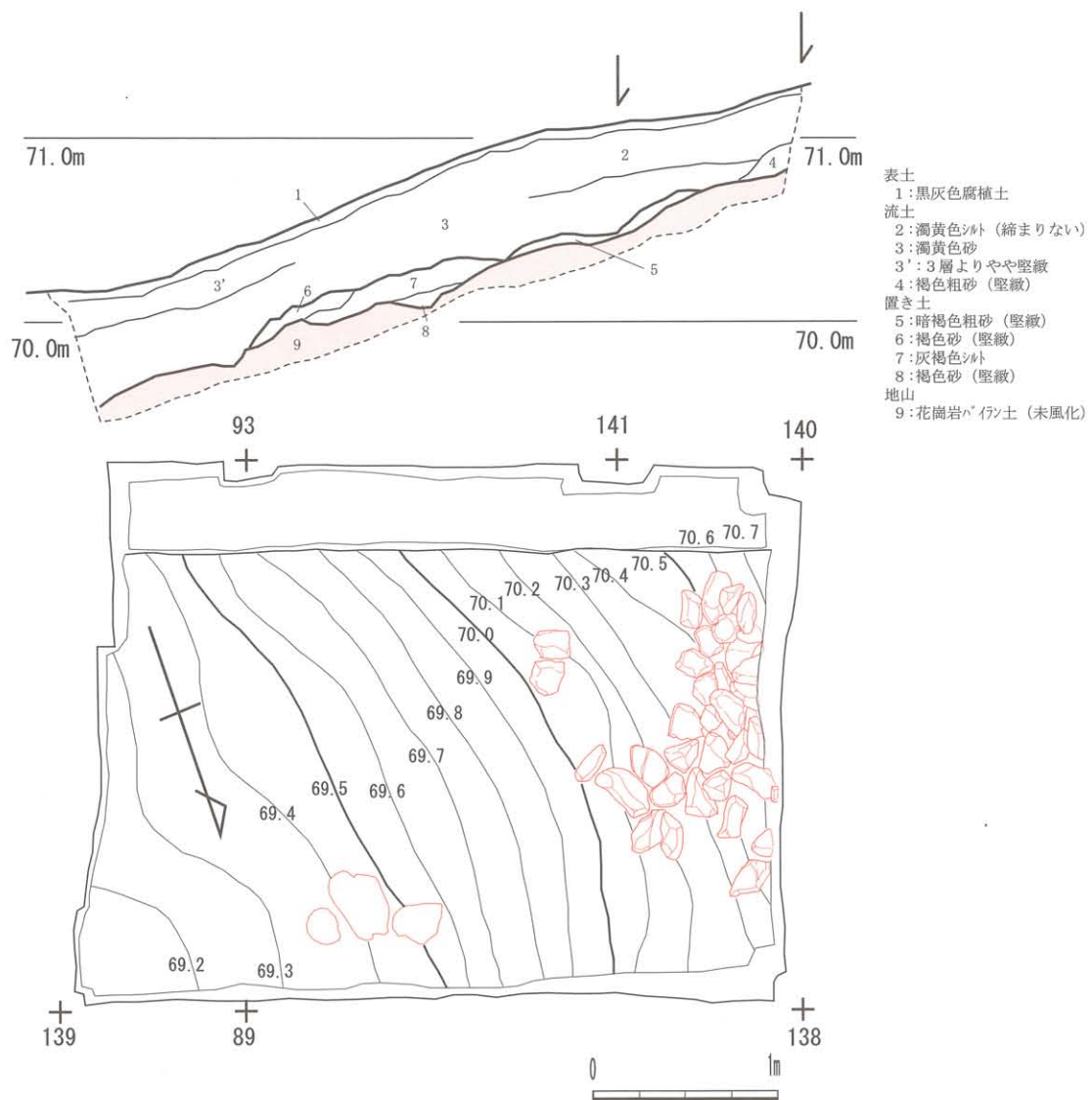


第5図 15トレンチ平・断面図 (S=1/60)

以上から、西面くびれ部（第三段斜面基底）の位置は後円部中心点の南19.8m、墳丘主軸ラインの西10.8m付近と推測する。またこれにしたがえば後円部中心点からの直線距離は22.5mを測ることになる。なお本トレンチで検出した墳丘は完全に地山を削り出し整形したものである。後円部頂に最も近いトレンチ東南隅で中心点から水平距離約19.5m、標高70.9mを測るが、ここまで盛土は広がっていないものと判断する。

2. 16 トレンチ：くびれ部東面（第6図 写真2）

設定の意図： 昨年の11・12・13トレンチでは断片的ではあるが、前方部東面の第一・第二・第三段斜面葺石基底部およびその間に設定された上下二段の平坦面を検出することができた。さらに後者では計5本の樹立埴輪基底部を確認した。また墳丘基底ラインに限っては11・12トレンチ東寄り、相当に緩やかではあるが曲折部分を検出した。本トレンチは、こうした成果を承けて墳丘東面におけるくびれ部の構造を確認する目的で設定したものである。特に第二・第三段斜面基底ライン屈折部の検出を期待した。



第6図 16トレンチ平・断面図 (S=1/40)

設定位置： 上記の目的にそって11トレンチの南に連続して、墳丘主軸想定ラインの東9

mを西縁に東西4m南北3mで設定した。トレンチ西南隅は墳丘中心点K10杭の東9m北17mとなる。

成果：当初予想に反して、外表施設を含めた墳丘表層の流出は著しく、明瞭な形で東面第三段斜面の屈折部を確認することができなかった。しかし先年の12トレンチなどの調査所見と本トレンチで検出した墳丘面の形状とから、おおよそ調査区南西隅から北辺中位に斜交する形で本来の第三段斜面屈折部位置を推測することができる。また非常に残りが悪く不明瞭だが、調査区東北隅に上方に比べかなり傾斜の緩い部分がある。隣接調査区の所見と併せて、この部分が上段テラスを反映するものと思われる。後円部墳丘に規制されて緩く弧を描き北西-南東に延びるように見える。この緩斜面部分（推定上段テラス部分）には転落石材・大型埴輪片が夥しく堆積する。この部分の標高は69.2m~69.4mを測る。以上から墳丘勾配や傾斜方向、さらに前年度の所見を合わせ、一応東面くびれ部位置（第三段斜面基底）は後円部中心点の南20m、墳丘主軸の東11.2mと推定しておきたい。また墳丘中心点からの直線距離は20mとなる。ちなみにこの数値は、標高値を含め、前節で推測した15トレンチ検出西面くびれ部位置（第三段斜面基底）とかなり整合的なものである。

これより上位の第三段斜面部と推測する墳丘（後円部側）の斜面勾配は25度を測る。また斜面中位に設定した調査区でありながら、墳丘面は現地表下0.4~0.6mに埋没している。堆積土量の多さは墳丘崩落の甚だしさを反映するものといえるだろう。この点と関連して流土中に包含される葺石材はテラス上部の堆積を除けば全体として多くないことが気に掛かる。墳丘あるいは周辺の再利用と関連して古い時期に除去された可能性も考慮すべきではあろうが、後円部斜面を含め墳丘上位部分の葺石被覆の充実度を検討する材料の一つである。

さて、本調査区に隣接する12トレンチでかなり良好に第三段斜面葺石の遺存を確認したが、ここではほとんどが脱落している。わずかに調査区西辺中央部に接するように局所的に残存する。南北最大1.7m東西1mで三角形状に残り、人頭大以上のやや大振りの円礫を主体とする。配列はかなり粗雑であるが、残存状況からみてもすでに多少ずれ込んでいるかもしれない。標高70.1~70.7m 高さ0.6m最大五段分となる。この他推定テラス部に接する位置に1.2の大型石材がある。葺石基底石の可能性もある。

17トレンチの所見を承けて本調査区でも南辺に断ち割り区を設定して墳丘築成状況を追跡した。明瞭な花崗岩バイラン土壌の地山面直上に、肌理が細かく堅緻で多少の炭灰細粒の混入を推測させる暗色土が層厚5~15cmで断続的に広がる。上部の締まりのない明らかな流土層とは区分できる土質である。細片を含め本層には全く遺物を混入しない。17トレンチ他で検出した盛土層の様態と異なるし確認位置もかなり低くなるが、墳丘斜面の形状補正や葺石配列に伴う置土の可能性を考慮しておきたい。

3. 17トレンチ：後円部北東斜面上位（第7図 写真3）

設定の意図： 昨年の3トレンチ拡張区では後円部頂から西面の墳丘築成状況、とくに盛土範囲とその様態を把握することができた。本トレンチでは後円部東北面方向、つまりくびれ部に向かう盛土の広がりを確認することを第一の目的とした。さらに地表面観察などか

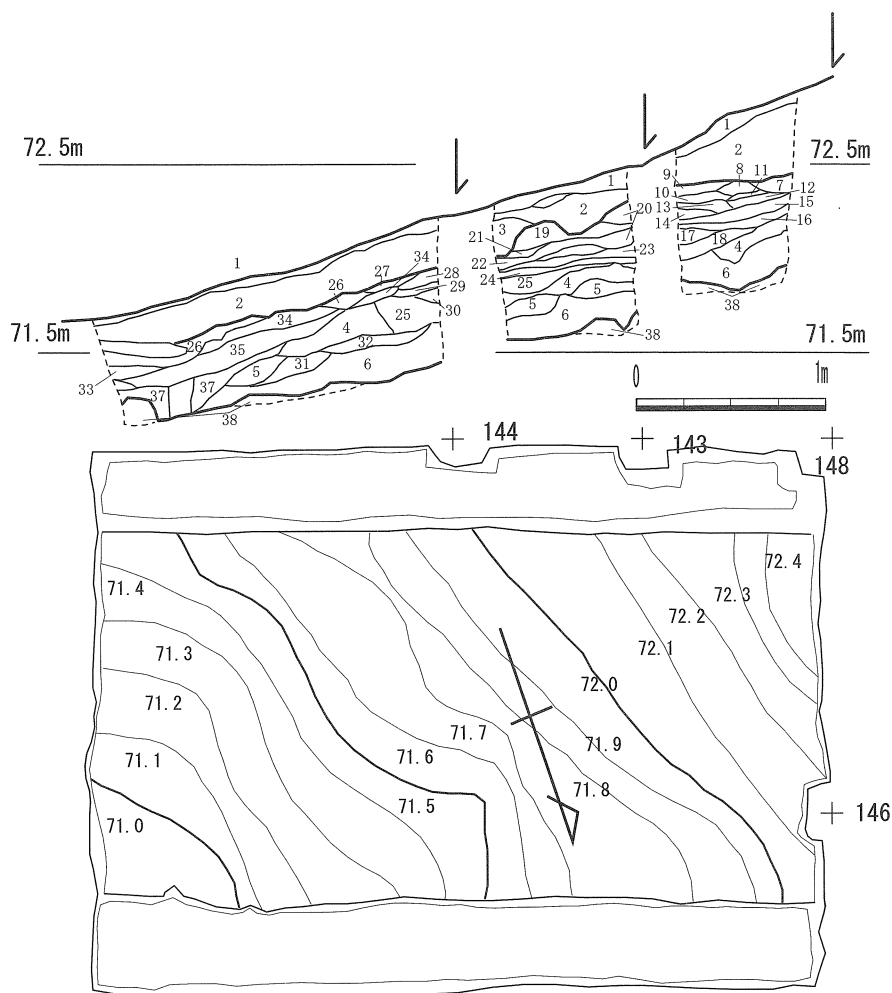
ら望み薄ではあったが、西面の3トレンチ拡張部を含めてこれまで確認できていなかった後円部斜面外表施設の痕跡を検出することをも期待した。

設定位置：前方部頂平坦面の標高とほぼ等しい後円部東北斜面の上位に位置する。16トレンチの南に併行して2mの間隔で南北（主軸方向）3m、東西4mの調査区を設定した。墳丘主軸想定ラインの東8mを西辺とし、K7杭の東8m南6mが本トレンチ西北隅となる。

調査区は後円部東北斜面の傾斜方向に斜交する形となるので、南西隅が最も高く、東北隅は1.5mほど低くなる。

成果：本調査区周辺の地表面観察では後円部墳丘南半部と異なり、明瞭な畑地開墾の形跡が読み取れなかったにもかかわらず、テラス、葺石などの外表施設は全く検出できなかった。また埴輪などの遺物もほとんど出土しない。残存墳丘面の上部に薄く堆積する流土層にもほとんど転落石材などを含まない。

本トレンチの調査では表層付近の明らかな流土を除去した段階でトレンチ南西部、つまりより後円部頂に近い斜面上方より部分で地山土とは多少異なる土質の広がりが見出され



- | | |
|-------------------------------|-----------------------------|
| 表土 | 流土 |
| 1 黒灰色腐植土 | 2 濃黄色粗砂層 |
| 盛土 | |
| 3 褐色粗砂礫 | |
| 4 黒灰色土（炭・灰片を含む）ブロック+地山土ブロック | 5 花崗岩パイン土ブロック |
| 6 花崗岩パイン土ブロック（風化進む） | |
| 7 暗灰色土（炭・灰片を少量含む） | 8 黄灰色土 |
| 9 黄灰色シルト+黒色土 | 10 暗灰色土（炭・灰片を少量含む） |
| 11: 黒灰色土（炭・灰片を含む） | 12: 暗灰色土（炭・灰片を少量含む） |
| 13: 白色粒を多く含む暗灰色シルト | |
| 14: 黒灰色土（炭・灰片を含む）+赤褐色砂礫 | 15: 黒灰色土（炭・灰片を含む）+褐色シルトブロック |
| 16: 黒灰色土（炭・灰片を含む）（堅緻） | 17: 暗灰色土（炭・灰片を少量含む） |
| 18: 暗灰色土（炭・灰片を少量含む）+褐色シルトブロック | 19: 花崗岩パイン土ブロック |
| 20: 白色粒を多く含む暗灰色シルト | |
| 21: 黒灰色土（炭・灰片を含む） | 22: 黄灰色シルト |
| 23: 黒灰色土（炭・灰片を含む） | 24: 暗灰色土（炭・灰片を少量含む） |
| 25: 暗灰色土（炭・灰片を少量含む）（締まり弱い） | 26: 暗灰色土（炭・灰片を少量含む） |
| 27: 黒灰色土（炭・灰片を含む） | |
| 28: 白色粒を多く含む暗灰色シルト | 29: 黒灰色土（炭・灰片を含む） |
| 30: 黒灰色土（炭・灰片を含む）（堅緻） | |
| 31: 花崗岩パイン土ブロック（風化進む） | 32: 花崗岩パイン土ブロック（細粒） |
| 33: 黒色土（炭・灰片を多量に含む） | |
| 34: 黒灰色土（炭・灰片を含む） | 35: 白色粒を多く含む黒灰色土（炭・灰片を含む） |
| 36: 黒色土（きわめて堅緻） | |
| 37: 花崗岩パイン土地に酷似するが濁る | |
| 地山 | |
| 38: 花崗岩パイン土（局部的に風化の度合異なる） | |

第7図 17トレンチ平・断面図（S=1/40）

たため、トレンチの南北辺に小規模な断ち割り区を設定して詳細確認を試みた。その結果、トレンチ南半では0.4～0.5mの厚さで盛土を確認した。しかし前方部寄りで低い北辺までは及んでいない。トレンチ西南隅で標高7.2m以高、東南隅で7.1.1m以高が盛土となる。つまり先年の3トレンチと同様に旧地形の上面を大きく均すことなく、自然的な起伏をとどめたままその上部に盛土を積み上げる。この所見に基づけば、後円部墳丘東北方向では盛土の範囲は中心点から1.7m以上2.0m未満となる。

盛土層は後円部西斜面3トレンチの構成と同様に、風化花崗岩片を多く含む地山土ブロック、肌理が細かく比較的堅緻な淡黄色土、炭灰を練り込んだと見られるきわめて堅緻な黒灰色土の三者を概ね互層に積む。各層は厚さ5cm内外と薄く層長も0.5～0.8mと比較的細かい単位となる。もっともトレンチ西半部、斜面上方部分ではこの中でも各単位は比較的細かく交互にかつ緻密に積むが、東半部では単位がやや大きくやや粗雑な感がある。こうした地点による盛土築成状況の微妙な差異は先の3トレンチでも観察した点である。なお検出した盛土面の勾配は約2.4度を測る。

第4節 くびれ部調査区出土遺物の概要

1. 快天山古墳関係遺物（第8～14図 表1 写真4～8）

今年度の調査では180コンテナで約8箱分の遺物が出土した。ただし樹立状態をとどめた資料もなく全体が細片化しているため、接合作業で旧状の復元を試みたが部位・寸法などの判明した資料は多くない。以下ではこれらのうち、15トレンチ16点 16トレンチ17点を中心に報告する。わずかな細片の出土にとどまった17トレンチ他の資料は掲載していない。随って今回報告資料の大多数は東西両くびれ部の上段テラスに流入・堆積した資料群と言うことになる。上段テラスに本来樹立・配列された埴輪などに加え、後円部上方から転落した資料を相当数含むものと思われる。

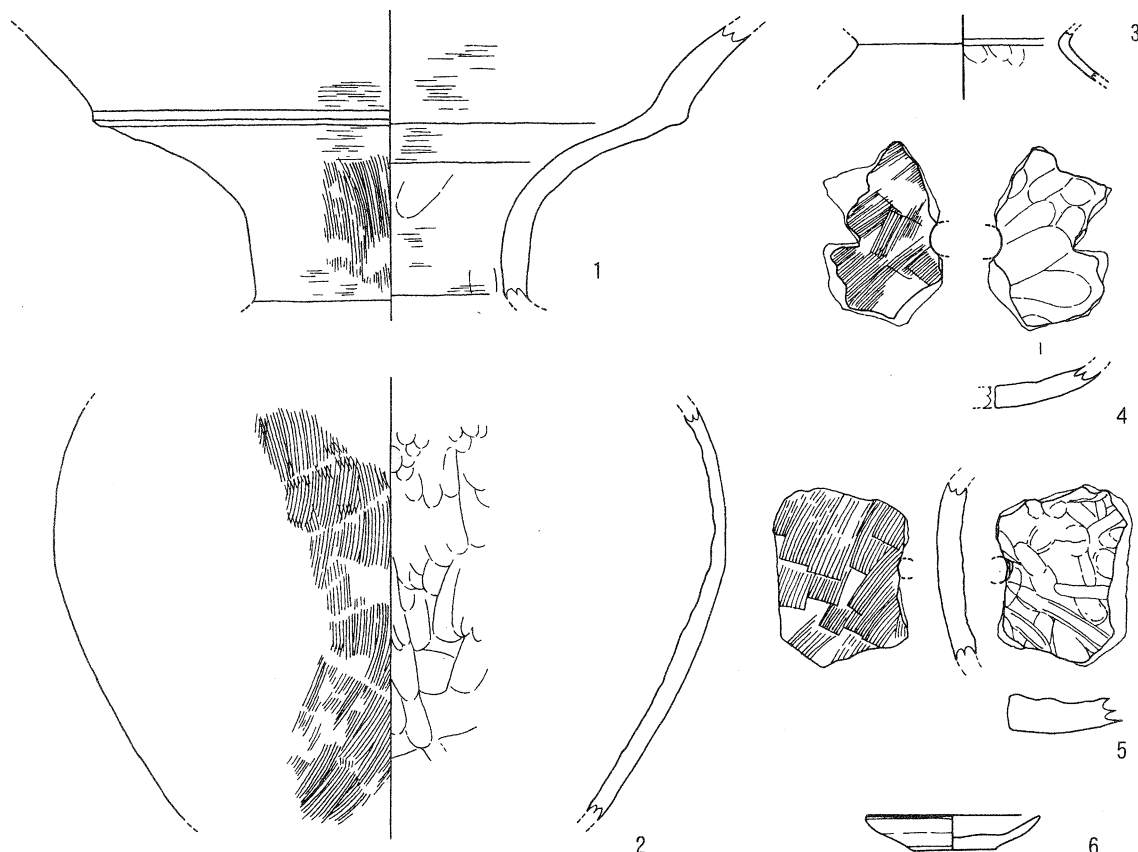
また詳細な破片数の比較は行っていないが、隣接地点でありながら昨年度の前前方部東面資料に比べて壺形埴輪がやや少ない印象を受ける。埴輪以外では小型甕などの小片若干を見るだけで既往調査と同様に土師器各種はごく微量である。また後世混入資料では平安期に下るものと思われる土師質小皿がある。これまでも各所から奈良時代後期～平安期の土器細片出土 昨年度検出した火葬墓をはじめとする古代における再利用の一端を示すものといえよう。

壺形埴輪（第8図）

一昨年度調査で出土した壺二重口縁部片に比べかなり大型厚手の口縁部片が目立ったことから、昨年度概報では朝顔形埴輪の存在について再検討すべきことを示唆した。しかし今年度調査でもその確証が得られなかった。またこのことに加えて既出土資料よりかなり厚手で、曲面の具合などから口縁部に見合った大型の体部を想定しうる破片が新たに出土した点を重視すれば、やはり朝顔形埴輪の存在は認めがたいと考える。この点昨年度概報で示した見通しを撤回しておきたい。

大型二重口縁部片の第8図1は頸部上半から外反を強めて緩やかに口縁部に至る。口縁立ち上がり部は強く外反して分厚い。端部を欠失するがさほど長く伸びないように見える。体部片第8図2は最大径位置の高いやや長胴に復元したが、小片のため傾き・体径は確定

的ではない。外面に赤色顔料の付着を見る。第8図4・5は径10～15mm大の焼成前穿孔の一部を残すので壺形埴輪底部片と推定した。穿孔手法と形状は一昨年度調査資料と同様である。しかし器厚と曲面の具合から大型の体部を想定しうるものである。1・2は黄白色系の色調・胎土を有するが、4・5は粗砂粒の目立つ橙色ないし褐色系の色調を呈する。



第8図 壺形埴輪 (S=1/4)

小型甕 (第8図)

小片のため詳細は不明であるが、小型の土師器甕と推測する。この他にこうした埴輪以外の小型器種細片若干が出土しているがいずれも器種などは特定できない。焼成・胎土から快天山古墳築造時期の所産と推測する。

土師質小皿 (第8図)

15トレンチの上段テラスに流入堆積した埴輪片・葺石材に混在して出土した小片である。立ち上がりはわずかに内湾気味に長く延びるので、土師質小皿としては古相のものである。底部外面に回転篋切り痕を残す。

円筒埴輪 (第9～14図)

今次調査では口縁部資料を比較的まとまって得ることができた。また中位段の大型片で透かし孔配置や突帯間隔に関するデータを多少補強することができたが、以前として円筒埴輪の全形を復元することは困難である。

円筒埴輪の諸要素については、少数例ではあるがこれまでの長方形透かし孔と相違する形状を確認した他は、概ね既知データと異なる部分はない。ただし、今回報告する東西両

くびれ部（概ね上段テラス以上の墳丘上半部）出土資料では、これまでとは異なり、黄白色系の胎土・色調を有し内面篋ケズリを多用する個体が目立って少ない。この点は今後の詳細な検討を要するが、今回報告資料に後円部墳丘転落資料が少なからず含まれると推測されることを重視すれば、興味深い傾向といえるだろう。

口縁部（第9図）

円筒埴輪の最上段口縁部の口径は40cm弱～45cm前後を測る。大小2タイプがありそうだが現状では断定しがたい。先端部はいずれも強く外反して短く延びる。多くは最上段高5cm内外と短い第9図6はやや長い。この部分に透かし孔を穿つものはない。口縁端の内外いずれかをわずかにつまみ出す傾向があるが目立ったものではない。外面は一次縦ハケの後に横ナデを加えるがその充実度は差異が大きい。もっとも第9図5のように外面横ナデを欠くものは今のところ例外的である。また第9図2のように調整横ナデが第二段以下に及ぶ例も少ない。口縁部内面には横ハケを加える。中位段資料でも同様であるが、突帯の断面形状は見かけ上変化に富む。しかしいずれも上下側面および頂面を強くなでつけて器体との密着を図っており、微妙な力加減で突出度や細部形状に差異が生じているようだ。第9図5では最上段突帯が剥落するが、貼付部分に刺突痕とおぼしき不定形な小さい凹みが観察される。

中位段（第10～13図）

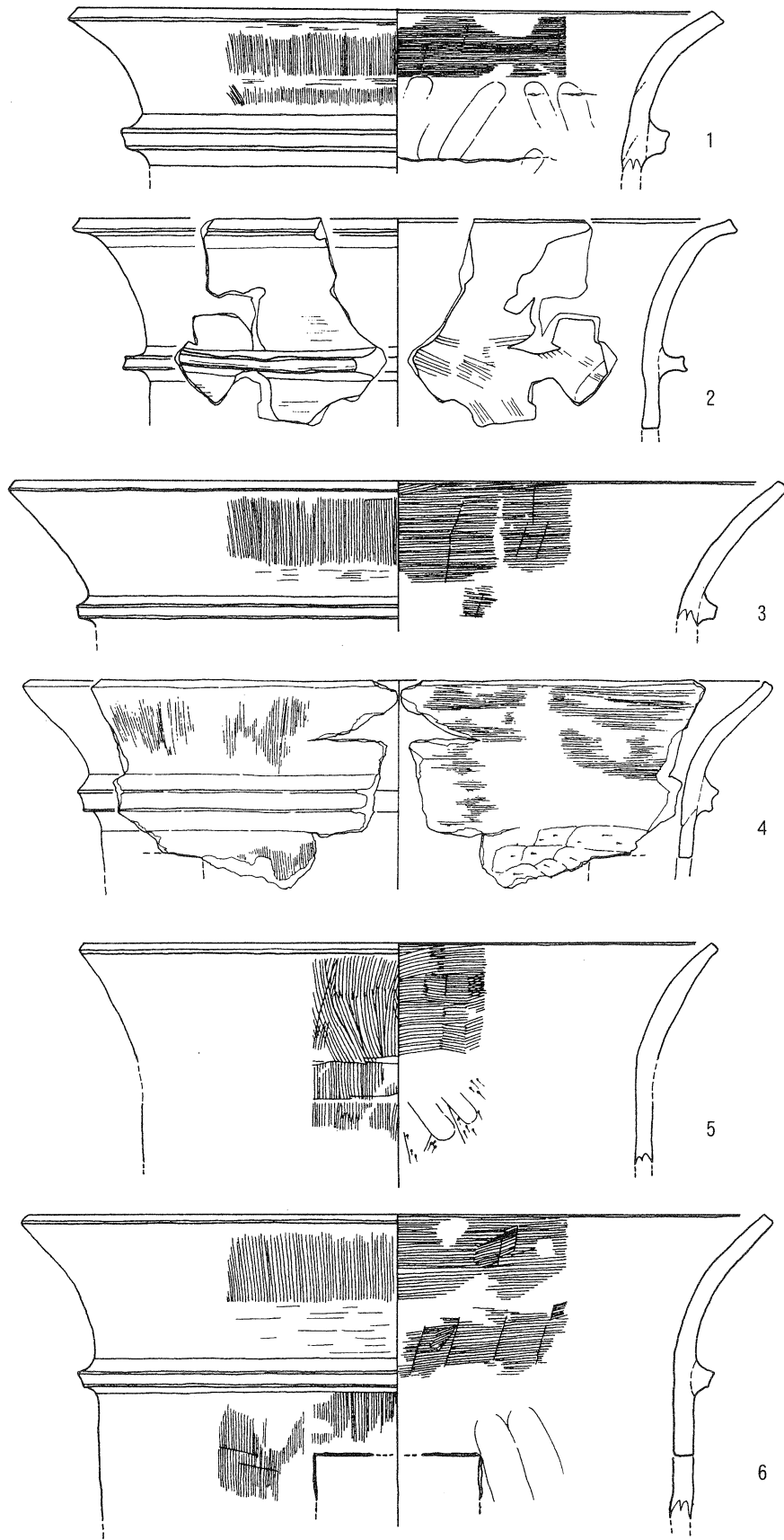
突帯間隔、つまり一段の高さを計測できた若干例では11～13cmとかなり規格的である。また円筒埴輪中位部の径（突帯部分で計測）は33～43cmまでの幅があるが、部位による変異を考慮すれば口径や底径と矛盾するものではない。

透かし孔は長方形を基調とするが、第10図3、第13図5では長方形と三角形透かし孔が共存する。これまでの調査でも小片でハケ調整の方向などから三角形透かし孔の可能性がうかがわれる資料若干が存在したが、明確な三角形透かし孔例は今調査資料ではじめて確認した。現状では詳細な分析を行っていないが9割以上は長方形透かし孔であろう。また第12図4では円弧の1/3弱をとどめた透かし孔を見る。半円形の可能性が高い。今調査資料でも透かし孔は四方/段が多そうである。また一昨年調査資料では交互配置を確認しており、今調査資料でも第10図4、第11図4、第12図1などは同様であるが、第10図3・4、第13図5では明らかに縦列配置となる。交互配置と縦列配置の比率は確認例数が乏しく明らかではない。

突帯の形状は口縁部で述べたように一定の差異を含むが概ね台形様で器体との接合は丁寧である。第12図1のように小型のものや、第13図1のように細身で突出度の高いものは多くはない。なお第12図4では突帯貼付位置に明瞭な方形刺突を見る。

中位段の外面調整は一次調整の縦ハケばかりで横ナデ他の二次調整はない。また概ね5条/cm前後の比較的細かなハケ調整が多い。一方、内面調整は今調査資料では縦方向あるいは斜位の指ナデ調整が多く、篋ケズリを施す例は少ない。また第11図1のように局部的に内面に横ハケ調整を施す例も多くはない。

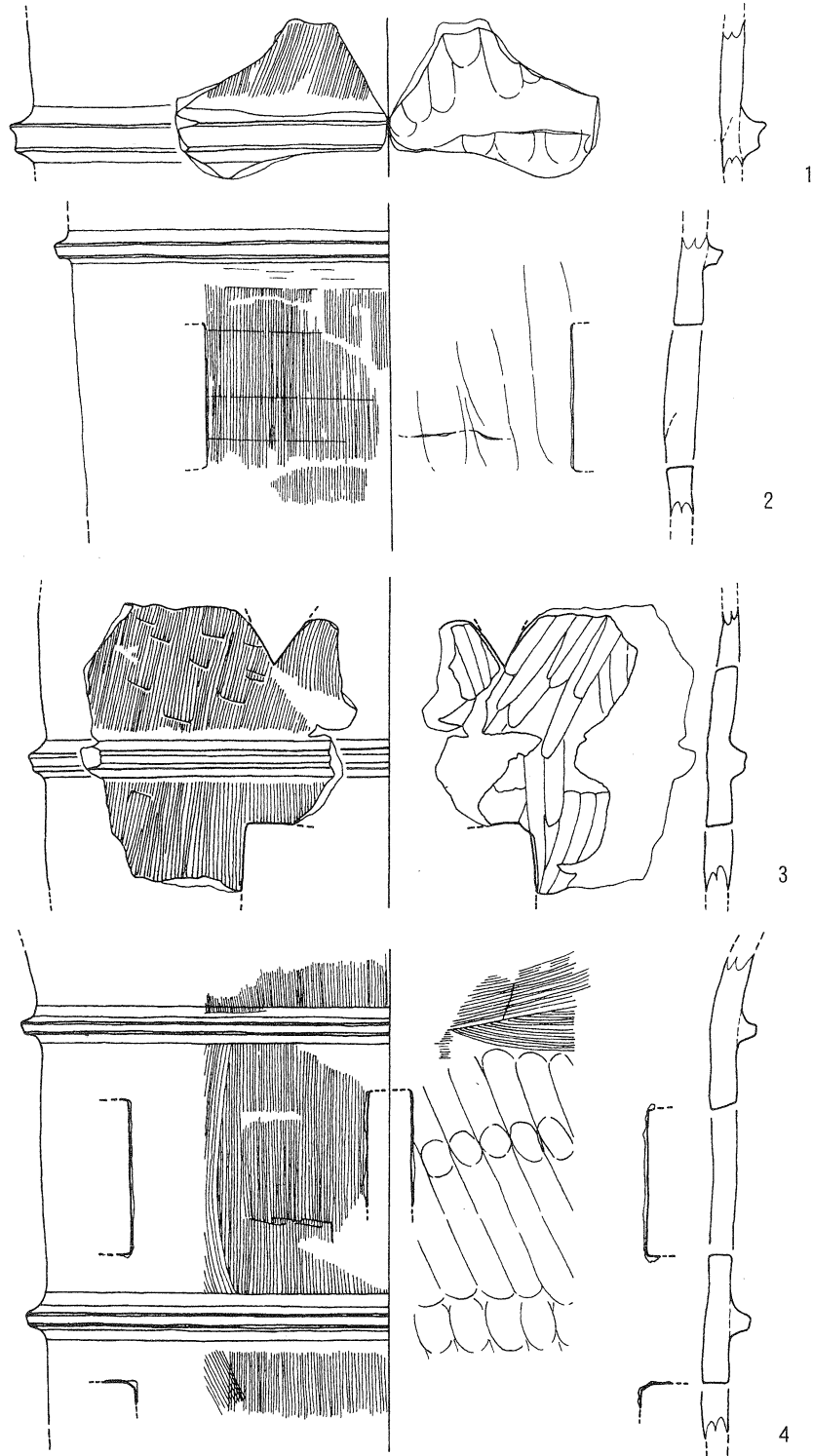
第13図5では細い篋描沈線で表現した線刻文がある。二ないし三条の平行線から構成される弧帯文の一部とも見えるが全体の構図は不詳であるし、表現もかなり粗雑である。昨年度資料に続き円筒埴輪線刻文は二例目となる。



第9図 円筒埴輪 1 (S=1/4)

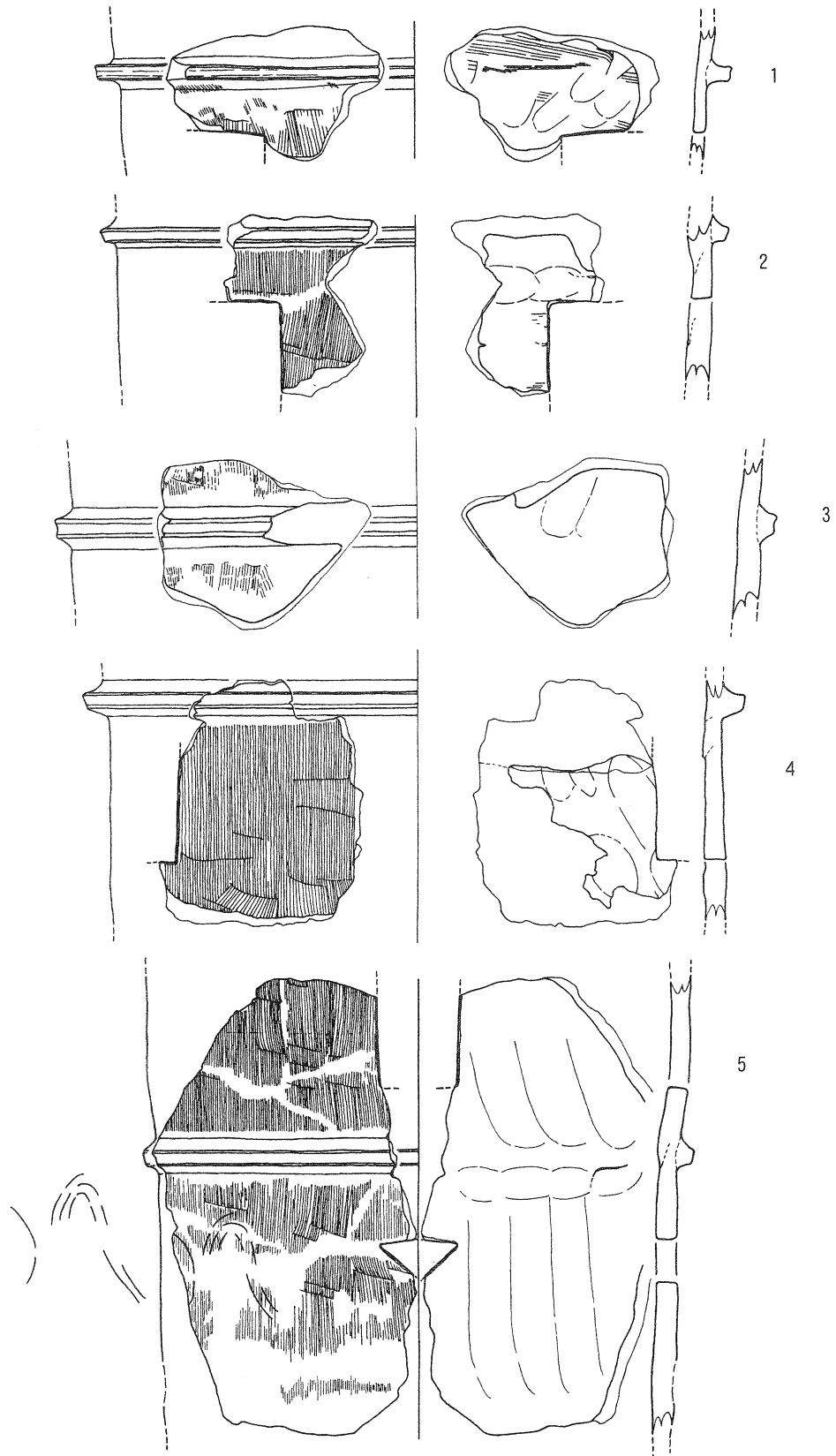
底部 (第14図)

計測した底径データでは24~42cm大と他部位よりも差異が大きいが、計測例数が少なく積極的な評価は難しい。また以下に述べるように、おそらく自重の負荷による歪みが個体差を増幅しているものと推測する。また最下段高は計測し得た唯一例では17cmを測



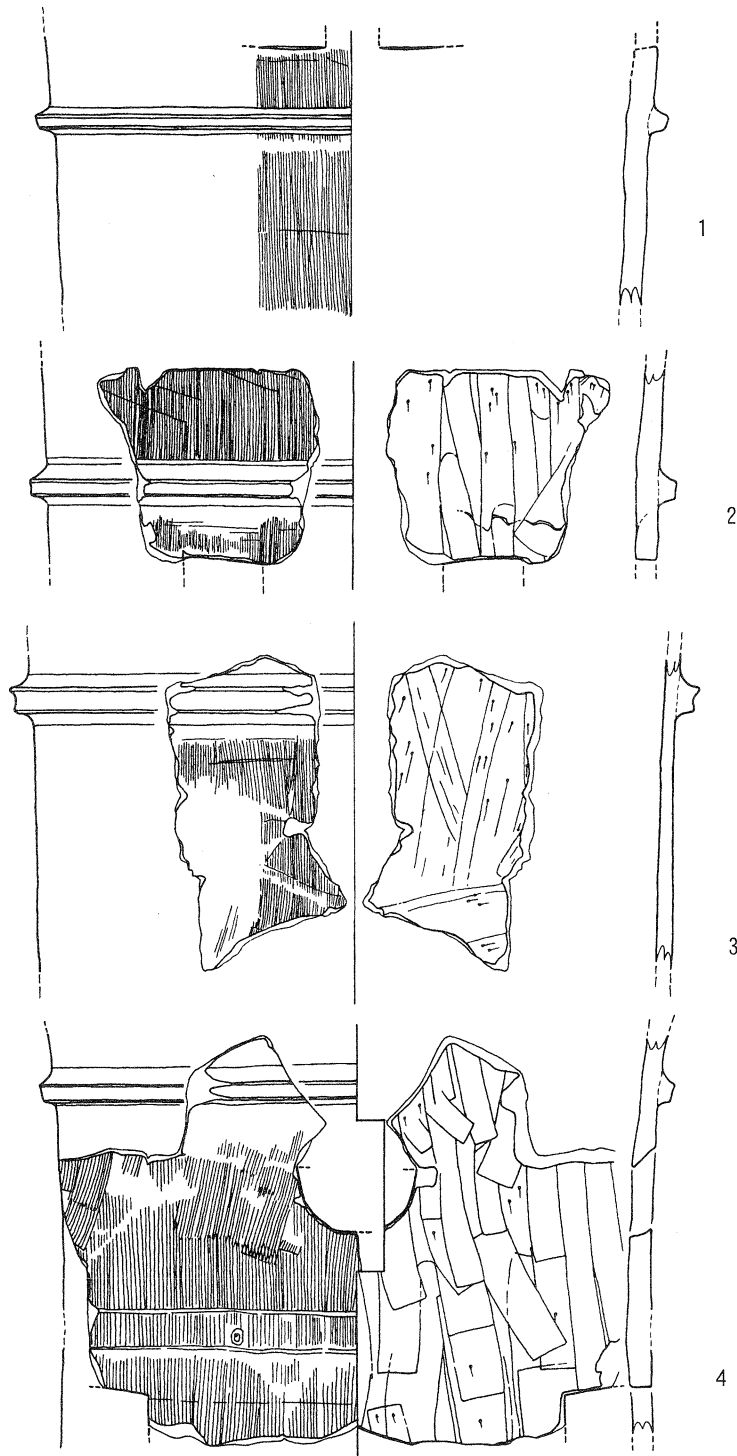
第10図 円筒埴輪2 (S=1/4)

り、他にも15cm以上と推測しうる例が認められるので、中位段の1.5倍内外の高さを持つものと思われる。下端は自重で潰れるものが多い。外面は縦竹調整を基調とし、内面

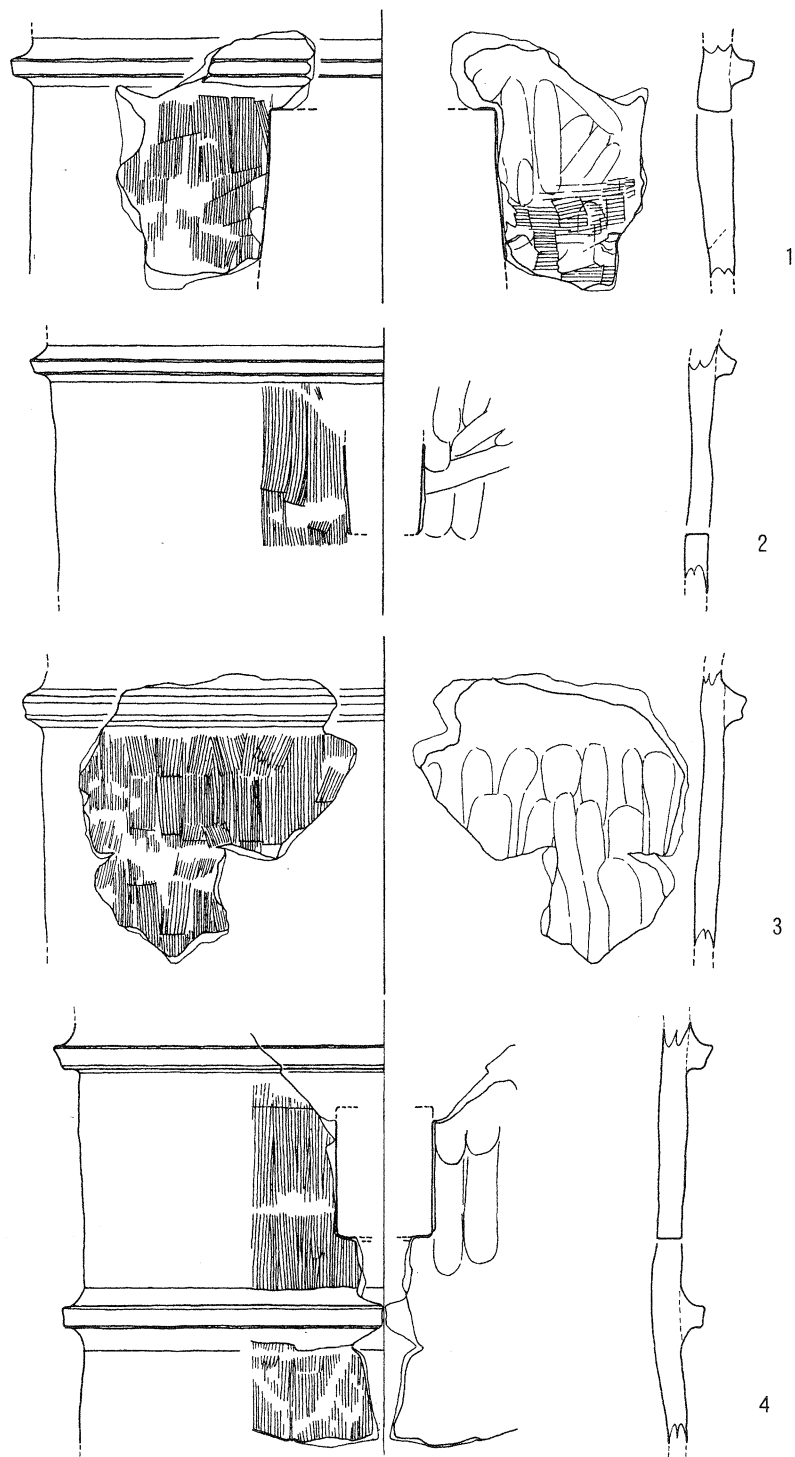


第11図 円筒埴輪3 (S=1/4)

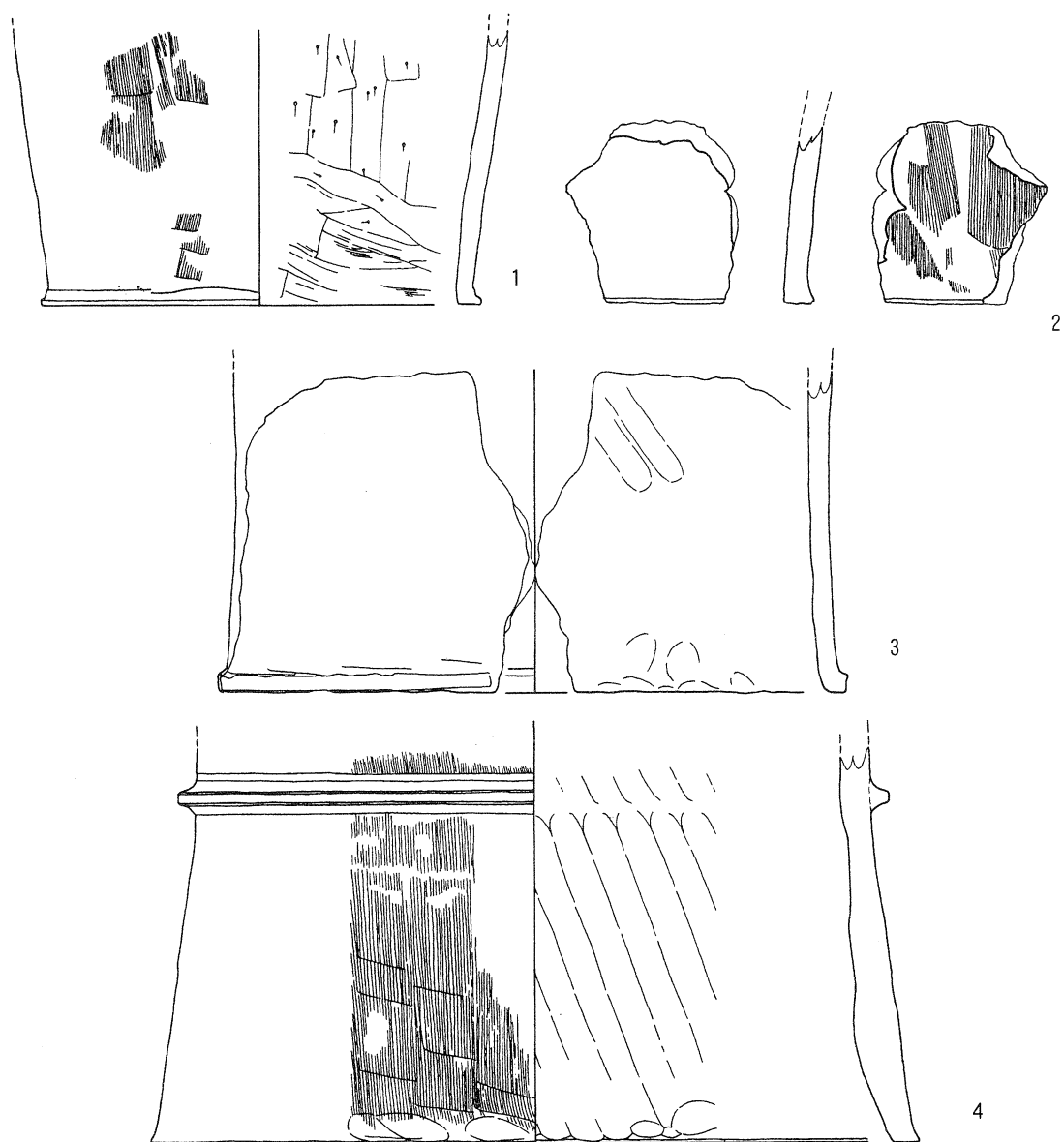
は斜位もしくは縦位の指ナデが多い。内面にケズリ調整を加えるものは第14図1だけである。また同資料では内面下端に横ケズリを加え、同図4では外面下端に連続的な指押さえ痕を観察するが、裾部の変形・歪みの補正を意図したものであろうか。



第12図 円筒埴輪4 (S=1/4)



第 1 3 図 円筒埴輪 5 (S=1/4)



第14図 円筒埴輪6 (S=1/4)

第5節 平成14年度調査成果補遺

平成14年度の3トレンチ拡張部（後円部西面）および、14トレンチ（前方部北半西面）については、すでに同年度概報で概要を示したが、調査実施時期との関係上、成果を詳細に図示する余裕がなかった。ここで3・14トレンチ成果を図示すると共に、該当部分の概要報告を再掲しておきたい。

1. 3トレンチ拡張部（第15図）

設定の意図：後円部埴丘の構造と外表設備の状態を確認するために、比較的後世の畑地開

墾の影響が少ないと見られた後円部西斜面で設定した調査区である。

設定位置：後円部横断軸に沿って、昨年度に設定した3トレンチ東端から墳頂平坦面西縁までの間（32杭～112杭間）に、東西延長15m幅2mで3トレンチ拡張区を設定した。

成果：残念ながら葺石やテラス面などの墳丘外表施設はほぼ完全に流出していたが、裁ち割り調査によって墳丘上半部が非常に堅緻に突き固められた盛土により形作られていることが確認できた。

現況でも3トレンチ拡張区を設定した後円部西斜面は部分的な墳丘崩壊もしくは後世の小規模な改変によると見られる凹凸が著しいが、この状況はそのまま墳丘遺存状態に反映している。トレンチ東半部つまり墳丘上半部では表層腐食土層の直下で堅緻な盛土面が検出できたが、墳丘下半部では表土下で厚い褐色細砂礫の水性堆積層が認められた。盛土層はトレンチ東端から10.8m（中心点から17.8m）まで標高70m以上で確認できる。したがって後円部頂に向かって多少地山面が隆起することを見込んでも後円部墳丘では4m内外の盛土厚を想定することができるだろう。現状ではこの地点で盛土末端が後世の改変もしくは墳丘の部分的な崩壊によって断ち切られているように見えるが、本来的には今少しは盛土部分が広がる可能性がある。これ以下の部分は本来的に地山整形により墳丘を整えているが、現状では上記したように局所的な抉れが連続し、その具体的な様相を復元することは困難だ。またトレンチ西半部で流土下層からややまとまって転落葺石材や円筒埴輪片を検出したが、その量は前方部各トレンチに比べ多くない。確実に原位置をとどめると判断されるものが全くなく後円部墳丘の外表設備に関する知見は得られなかった。

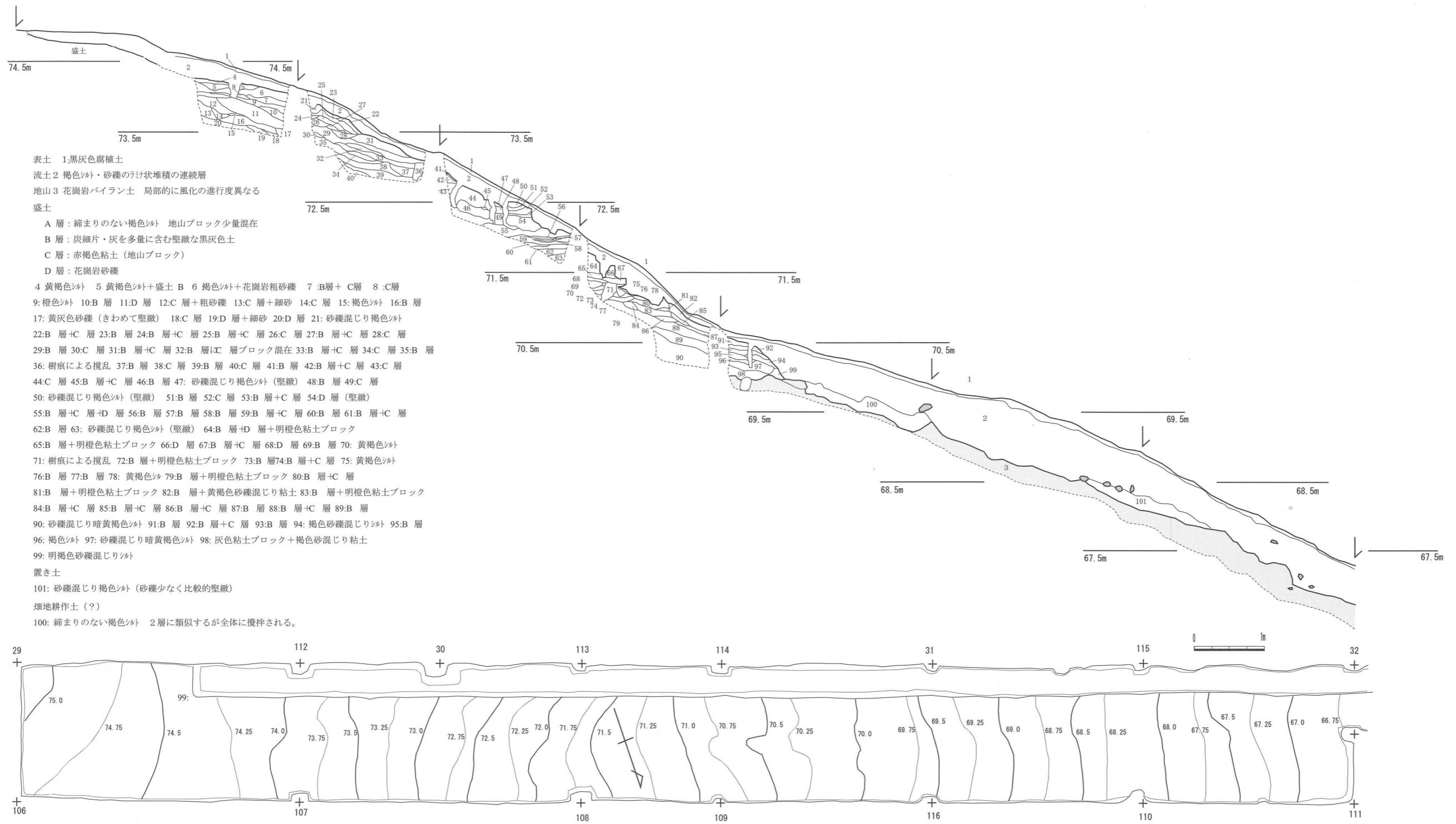
さて確認した盛土層の大部分ではa炭片を多く混入する砂礫混じり黒灰色粘土、b明橙色粘土、c多量の砂礫を混じえる明褐色粘土の3者を薄く互層状に積み上げている。部分的に地山の花崗岩バイ乱土をそのまま積み上げる箇所も見られるが、ごく局所的でしかない。盛土の各単位は短くあまり整然としていないが、いずれも非常に堅緻に突き固めており寺院基壇などのいわゆる版築土に硬度の点ではひけを取らない。こうした点で後円部墳丘上半部を構成する盛土は前方部の墳丘テラス面などの表層に敷かれた置き土とは全く異なっている。

なお、昨年度の3トレンチ東端で地山直上で盛土層の可能性のある層序の存在を指摘したが、今回の調査でその部分を地山層の風化部分と理解することが適当と判断できたので、訂正しておきたい。

2. 14トレンチ（第16図）

設定の意図：農道切断部以北の前方部前半部分は改変が著しく現状では墳丘形態の観察は困難である。特に墳丘東側面の基底部付近は鶏舎設置時に完全に削り込まれて残存していない。西側面も分厚く建設残土を積み上げ現況で観察は困難であるが、その下部に墳丘基底部が残存すること期待して、前方部前半部の墳丘形態および外表設備を確認するために設定した調査区である。

設定位置：見かけ上のくびれ部と7トレンチで確認した前方部前端区画溝との中間地点にほぼ相当する主軸上に設定した118杭の西9mを南東隅として幅2m東西延長12mの



第15図 3トレンチ平・断面図(S=1/60)

調査区を設定した。昨年度設定した2トレンチと18mの間隔で並行し、トレンチ北壁は前部前端区画溝から約12.5m南に位置することになる。調査区設置に先立ち、建設重機で農道部分を含めて墳丘西斜面に厚く盛られた建設残土・客土を4m幅で完全にはぎ取り旧表土層を露出させたが、残念ながら前部前半部ではおおよそ標高69.5m以上の墳丘上半部の西半が一端完全に削平されていることがこの段階で判明した。

成果：したがってこの地点で旧状をとどめているのは標高69.5m以下の墳丘基底部付近に限られるわけであるが、幸い墳丘第一段石列と第二段斜面葺石基底部、およびその間の下段テラス面を確認することができた。

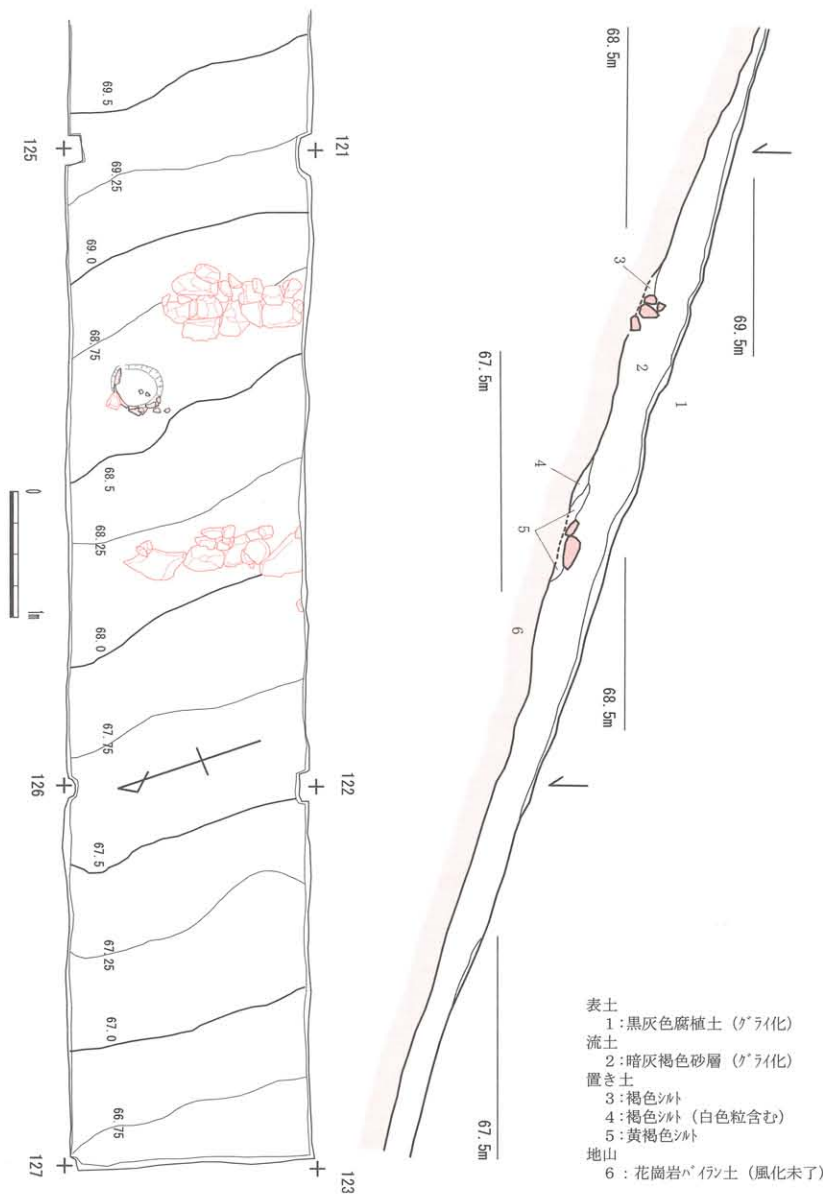
第一段石列

主軸から水平距離16.4mでほぼ並行して第一段石列を検出した。トレンチ南端から1.5mほどが遺存する。基底レベルは68.0~68.1mとわずかに北に向かって迫り上がる。基底には幅50cm大の大型石材を横に並べ部分的にその上部に拳大の礫を重ね

20~30cm大の段を形作る。

第二段斜面葺石

主軸から水平距離14.4~5mでほぼ並行して第二段斜面葺石基底列を検出した。トレンチ南端から約1.2mほど遺存し基底レベルは68.65~68.75mと、第一段石列と同程度にわずかに北に向かって迫り上がる。基底石は第一段石列よりやや小振りな人頭大の大型石材を概ね横向きに並べ、その上には小児頭大~拳大の礫を斜めに差し込むように重ねる。最大5段分幅60cmほどが残存する。なおこの地点では第一段石列を含め使用石材は安山岩自然礫ばかりであっ



第16図 14トレンチ平・断面図 (S=1/60)

た。

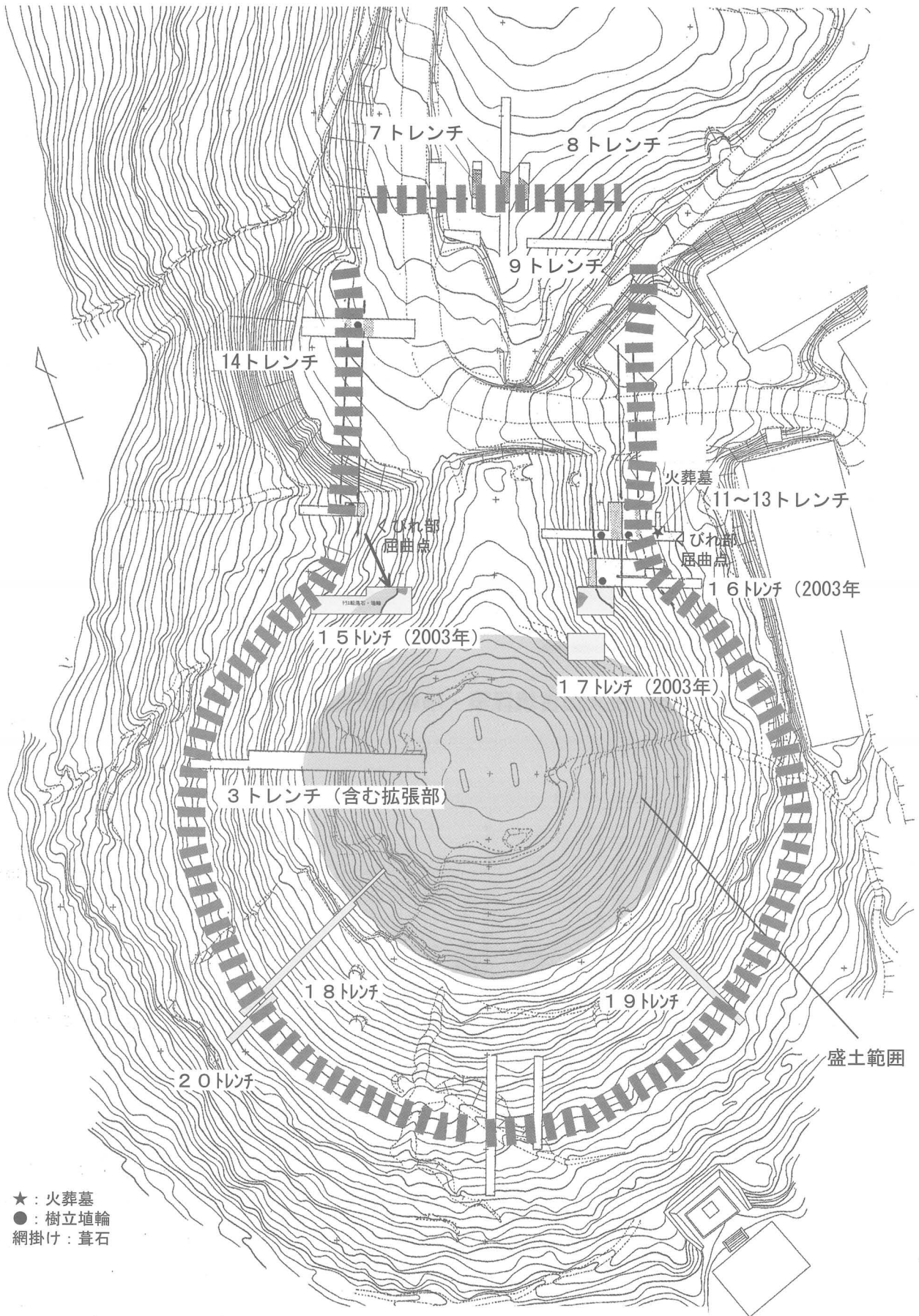
下段テラス

第一段石列と第二段斜面葺石の間、幅1.5m比高0.4mほどの緩斜面が下段テラスとなる。他地点で確認した下段テラスに比べかなり狭くなっている。やはり地山整形の後に若干の置き土で上面を整えたものと見られる。トレンチ北半で第二段葺石基底と20cmの間隔で据えられた円筒埴輪基底部を検出した。他地点のテラス面に樹立された円筒埴輪とは異なり、地山面を浅く掘り窪めて埴輪基底を据え付けている。また他地点のように内部に小礫を詰めていない点も相違している。

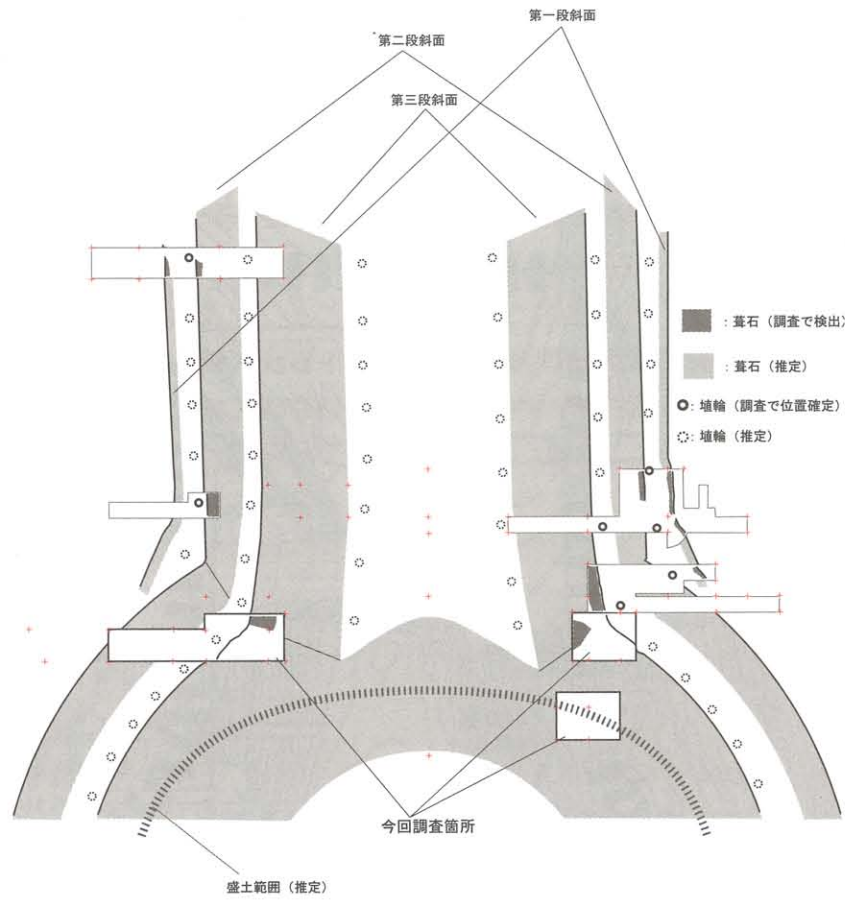
円筒埴輪片の他、壺形埴輪体部片などが出土しているが量は多くない。

押図番号	遺物番号	出土地点	器種	残存部位	径	段高	透かし孔		外面調整	内面調整	色調		胎土	備考
							形状	配列			外面	内面		
5	1	15T	壺形埴輪	口頸部	口:38cm+α				頭部縦ハ口縁横ハ後横ハ後横ハ	頭部縦指ハ後口縁横ハ後横ハ	黄灰色	黄灰色	2~3mm大の石英多い	
5	2	15T	壺形埴輪	体部				縦ハ	下半縦ハ上半指ハ		黄灰色	黄灰色	2~3mm大の石英多い	赤色顔料塗布?
5	3	16T	小型甕?	肩~頸部	頸:10cm			一部横ハ	体部指ハ口縁部横ハ		黄褐色	黄褐色	1mm未満の石英・赤色粒	
5	4	15T	壺形埴輪	底部				ハ	指ハ		黄褐色	黄褐色	2~3mm大の石英・長石・赤色粒細粒多い	焼成前穿孔径15mm
5	5	16T	壺形埴輪	底部				ハ	指ハ		淡褐色	淡褐色	2~4mm大の石英・長石・赤色粒含む	焼成前穿孔径10mm?
5	6	15T	土師質小皿	底部~口縁	口:4.6cm			横ハ	底面回転器切り	横ハ	淡褐色	淡褐色	水滲し粘土	
6	1	16T	円筒埴輪	最上段・第二段	口:38.8cm	6.2cm	?	?	縦ハ後一部横ハ	口縁部内面横ハ	明褐色	明褐色	1~4mm大の石英・長石多い・赤色粒含む	
6	2	15T	円筒埴輪	最上段・第二段	口:39cm	6.2cm	長方形	?	縦ハ後丁寧な横ハ	突帯裏面付近粗い横ハ後全体横ハ	明褐色	褐色	1~2mmの石英・長石・赤色粒	
6	3	16T	円筒埴輪	最上段・第二段	口:46cm	5.6cm	?	?	縦ハ後突帯付近横ハ	緻密な横ハ	明褐色(黒斑?)	淡褐色(黒斑?)	2mm大の石英・長石・赤色粒	
6	4	16T	円筒埴輪	最上段・第二段	口:44cm	5.6cm	長方形	?	最上段縦ハ後横ハ第二段一次縦ハ	最上段横ハ第二段ハ	黄褐色~黄褐色	黄褐色(黒斑)	1~2mmの石英・長石・赤色粒	
6	5	15T	円筒埴輪	最上段・第二段	口:45cm	6.2cm	?	?	全体一次縦ハ突帯貼付部分整く横ハ	縦ハ後最上段横ハ	明褐色	明褐色	1~2mmの石英・長石・赤色粒	
6	6	16T	円筒埴輪	最上段・第二段	口:44.1cm	8.4cm	長方形	?	全体一次縦ハ後最上段下半横ハ	第二段縦指ハ後最上段横ハ	褐色(黒斑)	黄褐色	2~3mm大の石英・長石多い・赤色粒含む	
7	1	16T	円筒埴輪	中位段	体:41cm		?	?	一次縦ハ	縦指ハ	黄白色・淡褐色	黄白色・淡褐色	2~3mm大の石英・長石・赤色粒非常に多い	二種の胎土併用か?接合単位で発色異なる
7	2	16T	円筒埴輪	中位段	体:36.6cm		長方形	?	一次縦ハ	縦指ハ	明褐色	褐色	2~3mm大の石英・長石・赤色粒多い	
7	3	16T	円筒埴輪	中位段	体:39.2cm		長方形・三角形	縦列	一次縦ハ	縦指ハ	淡褐色	暗褐色	2~3mm大の石英・長石・赤色粒多い	
7	4	15T	円筒埴輪	最上段~第三段	体:40.2cm	13.2cm	長方形	縦列	一次縦ハ	縦指ハ・最上段横ハ	明褐色(黒斑)	明褐色	2~3mm大の石英・長石・赤色粒多い	
8	1	15T	円筒埴輪	中位段	体:39.2cm		長方形	?	一次縦ハ	指ハ後一部横ハ	明褐色	明褐色	1~2mmの石英・長石・赤色粒	
8	2	15T	円筒埴輪	中位段	体:37.6cm		長方形	?	一次縦ハ	縦指ハ	明褐色	暗褐色	2~3mm大の石英・長石・赤色粒多い	
8	3	16T	円筒埴輪	中位段	体:38.2cm		?	?	一次縦ハ	縦指ハ	黄褐色(黒斑)	褐色	2~3mm大の石英・長石多い・赤色粒含む	
8	4	16T	円筒埴輪	中位段	体:35cm	11.4cm	長方形	交互	一次縦ハ	縦指ハ	淡褐色	暗褐色	2~3mm大の石英・長石・赤色粒非常に多い	
9	1	16T	円筒埴輪	中位段	体:33.4cm		長方形	交互	一次縦ハ	指ハ後一部横ハ	明褐色(黒斑)	暗褐色	2~3mm大の石英・長石・赤色粒非常に多い	
9	2	15T	円筒埴輪	中位段	体:34.2cm		長方形	交互	一次縦ハ	縦ハ	明褐色	明褐色	1mm大の石英・長石・赤色粒	
9	3	16T	円筒埴輪	中位段	体:36.6cm		?	?	一次縦ハ	縦ハ主体で一部横ハ	淡褐色(黒斑)	明褐色	2mm大の石英・長石・赤色粒	器壁薄い
9	4	15T	円筒埴輪	中位段	体:33.6cm	11cm	円?	?	一次縦ハ	縦ハ	明褐色(黒斑)	明褐色	2mm大の石英・長石・赤色粒	突帯貼付位置方形刺突
10	1	15T	円筒埴輪	中位段	体:38.4cm		長方形	?	一次縦ハ	指ハ後一部横ハ	明褐色(黒斑)	明褐色	1mm大の石英・長石・赤色粒	
10	2	16T	円筒埴輪	中位段	体:37.8cm		長方形	?	一次縦ハ	横指ハ	明褐色(黒斑)	暗褐色	2mm大の石英・赤色粒	
10	3	16T	円筒埴輪	中位段	体:43.4cm		?	?	一次縦ハ	縦指ハ	淡褐色(黒斑)	明褐色	2~3mm大の石英・長石・赤色粒非常に多い	
10	4	16T	円筒埴輪	中位段	体:39.4cm		?	?	一次縦ハ	縦指ハ	明褐色	暗褐色	2mm大の石英・赤色粒	10-2と同一物体の可能性
10	5	15T	円筒埴輪	中位段	体:33cm	11.2cm	長方形・三角形	縦列	一次縦ハ	縦指ハ	淡褐色	暗褐色	1~2mmの石英・赤色粒多い	藍描線刻文
11	1	15T	円筒埴輪	最下段	底:24.2cm				一次縦ハ	縦ハ後最下部横ハ	明褐色	褐色	1~2mmの石英・赤色粒多い	
11	2	16T	円筒埴輪	最下段					外面剥落	縦ハ	淡褐色	暗褐色	2~3mm大の石英・長石・赤色粒非常に多い	
11	3	15T	円筒埴輪	最下段	底:34.2cm				外面剥落	内面剥落	濁黄色	濁黄色	2~4mm大の石英・長石・赤色粒非常に多い	
11	4	15T	円筒埴輪	最下段	底:42.2cm	17cm			一次縦ハ	縦指ハ	淡褐色	明褐色	2~3mm大の石英・長石・赤色粒多い	

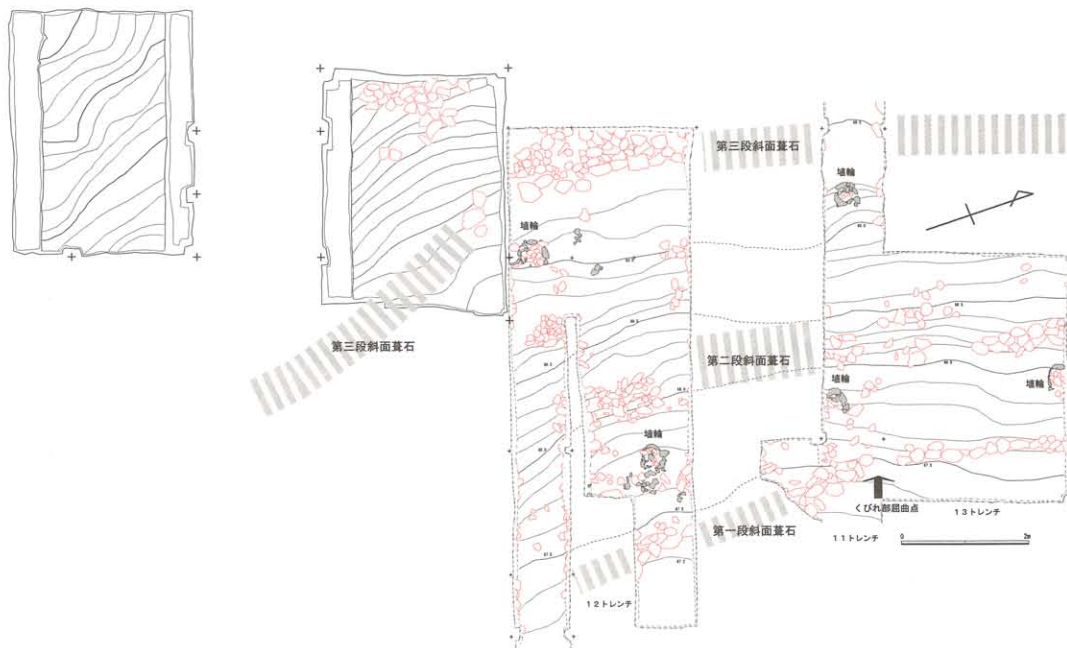
表1 遺物観察表



第17図 快天山古墳調査区配置図



第18図 快天山古墳段築・埴輪復元推定図（前方部）



第19図 前方部東面調査区平面図

第6節 後円部調査区の概要

1. 18トレンチ：後円部南西面（第20図 写真9）

設定の意図：快天山古墳の後円部は、主体部のある後円頂部を中心に南半部は畑地として利用されていた。また、かつては葺石として葺かれていたと思われる石材が、現地表面上に散在していたり、用悪水路の縁石として利用されていることもあり、墳丘施設の残存については、あまり期待できないと考えていた。一昨年度の調査で墳丘南端に4・5トレンチを設定したが思わしい成果があがっていなかった。これは墳丘主軸上で設定したもので、地形測量図からも判るように後円部でも特に改変を受けていることが予想される箇所であった。そこで、後円部南半部の中でも比較的残りが良いと思われる部位で再度墳端及び墳丘構造等についての確認調査を実施することにした。

設定位置：一昨年度の調査で3・4・5トレンチを後円部に設定し、施設や墳丘基底部を特定でき得る成果は確認できなかったが、傾斜変換点を検討することによっておおよその墳端ラインについて推定することが可能となった。

そこで、検討を重ねた結果、後円部墳頂のK10杭から墳丘主軸ラインを南から西に45度振ったラインに調査区を設定することにした。

設定箇所は、推定される墳端ラインを2m程度越す辺りから内側へ10m余りとした。しかし、墳端と推定されるポイントに巨木があったことから、下部は、その巨木までとし、後述する20トレンチを、巨木を避けるように南側に平行に設定することになる。

当初は、A14杭からA4杭までの11mの延長であったが、調査の進行に伴い上端部をA3杭まで5m延長し、その後トレンチ幅を半分にして更にA2杭までの5mを延長した。

結果的に18トレンチは、後円部中心のK10杭から15m～36m地点の延長21m、地表標高で72.32m～64.89mの比高7.43mとなった。トレンチ幅は、0.8mを基本とした。総面積は14.8㎡であった。

成果：調査を進めた順を追って状況を述べると、まずA4杭～A14杭の11m区間であるが、地表観察で分かるとおり、従来畑地として利用されていたことに伴う畝の痕跡をA11杭より上部でくっきりと残している。この畝形状はそのまま地山に現れており、畑地への開墾が墳丘にまで及んでいることが確認できた。

地山の直上には、A4杭～A6杭まではやや暗い灰黄色の粘性を帯びた土の堆積が見られた。その上部は同色系ではあるが濁りの強い土が20cm程度の厚みで地表面まで堆積していた。これは、畑地として使用されていた当時の耕作土であると読み取ることができる。この耕作土はA14杭のところまで同様の堆積を見せる。また、その下層の暗灰黄色粘質土も同様に堆積を見せているが、トレンチ中程のA6杭～A9杭の間で様相を変える。

A7杭を中心に近世以降の掘削痕が見られるが、丁度それを挟むような土層が確認できた。これは、黄褐色の地山に程近いものであるが、白色砂粒を多く含んでおり上述している締まりのない堆積層とは明らかに性質を異にするもので、かなりの締まりを見せていることから盛土として考えた方が相応しい。同様のものは昨年度調査した3トレンチでも確認されている。これは地山を削り出して造形した墳丘の部分的に旧地形が不足する部分や細かい整形段階に置土として用いられたものと考えられる。そう考えるとこの部

位に何らかの施設のための造作が成されたことが想定できるが、皮肉にもその中央に近世以降の掘削が及んでいることや、その上部や周辺部が開墾によって旧地形を留めていないことが考えられることによって、それが何であるのかをこの部位だけで判断するまでには至らない。

A 1 0 杭より下部では開墾以前の堆積層が確認できる。特にその各堆積に遺構が伴うものでもなく、どの時代にどのような堆積をしたのかは判断できない。

旧地形を比較的留めていると考えられるA 1 0 杭～A 1 4 杭間の地山傾斜を観察すると、A 1 2 杭の下部で傾斜角が1 9 度から3 4 度へときつくなっていることから外表施設の痕跡の可能性を残す。

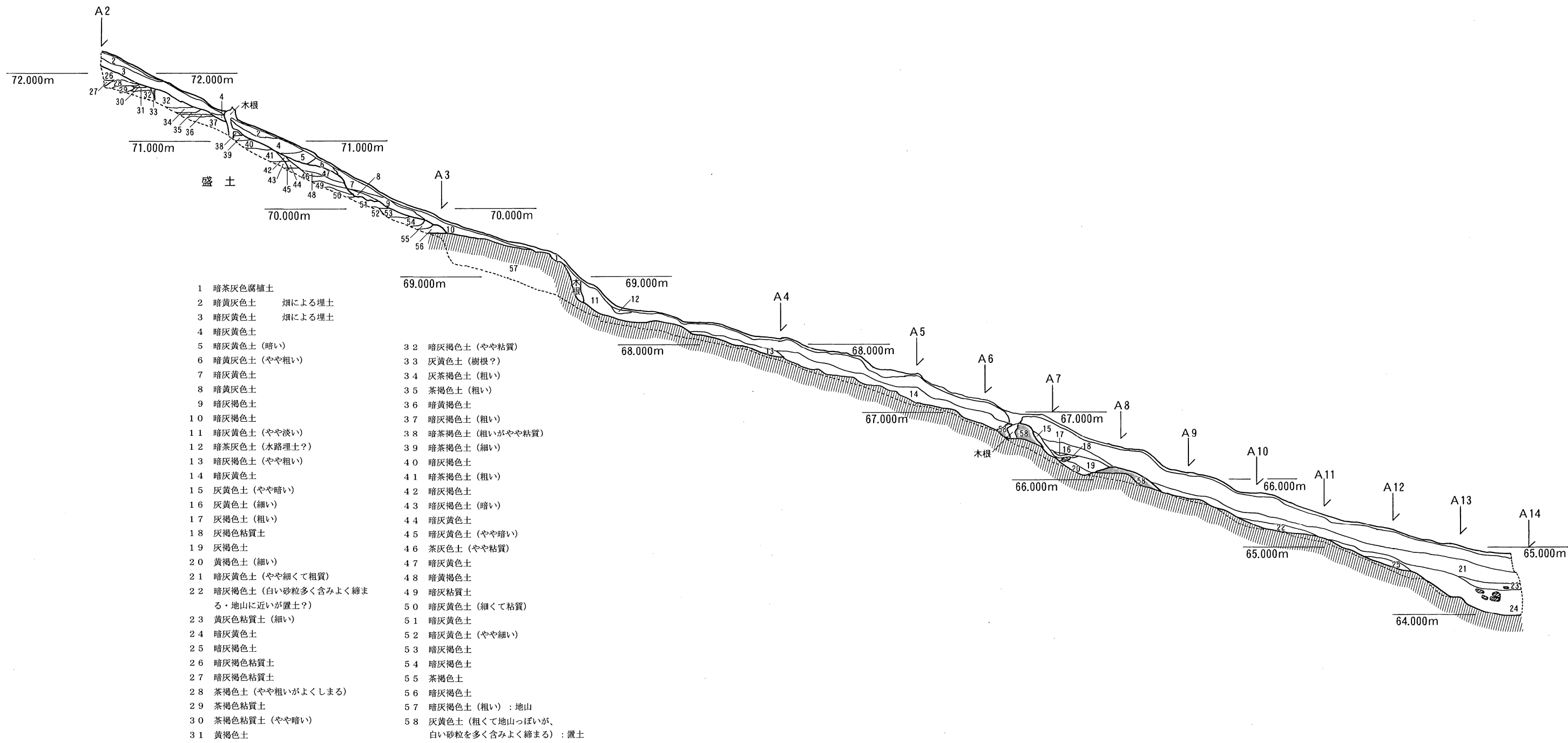
また、A 1 3 杭～A 1 4 杭の間には土壌状の窪みがあり埴輪片を含む礫が堆積していた。埋土の中に埴輪片を含んでいることから快天山古墳築造当時のもではなく後世のものと考えられることができるが、遺物は埴輪片と礫のみであることから時期の特定はできない。

唯一遺構と捉えることができるものは、上述した傾斜変換点から5 0 cm内側のポイントを中心に浅いピットを検出した。埋土はやや淡い灰黄色土で僅かに1 点であるが円筒埴輪片(第2 3 図1)が混入している。このことから、この遺構は円筒埴輪の据付壇である可能性を考えることができる。

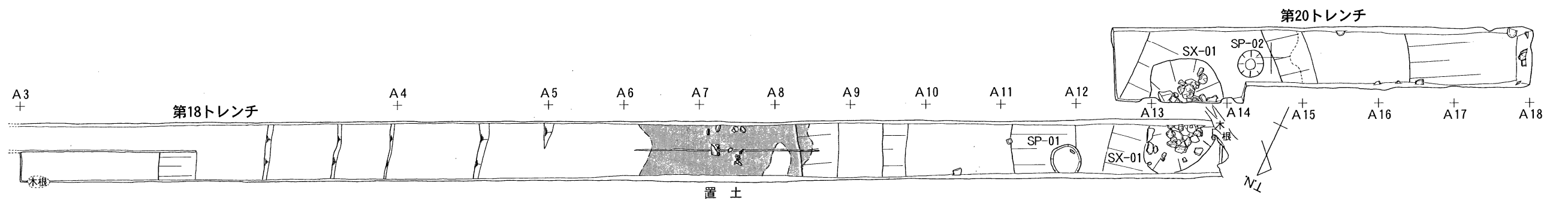
このトレンチで検出した出土遺物は、全てがA 6 杭より下部でのものであり、耕作土下の堆積層に含まれていることから、開墾以前に元位置から流出していたものと考えられる。また、そのほとんどが碎片化しているが形状を留めているものも含んでいることから元位置に近いところでの散在と考えられる。また、これらの遺物は数箇所集中して出土している。A 7 杭周辺の置土付近とA 1 2 杭のピット周辺及びA 1 3 杭～A 1 4 杭間の土壌部に集中していることからその付近で遺物を伴う外表施設(テラス面・円筒埴輪列)の存在が予想される。

A 3 杭とA 4 杭の間に大きく段になっている箇所があるが、これは掘削によってできたものと考えられることができるが、地形測量図を観察するとその段下の平坦部が後円部斜面で円弧を描くように延びていることからトレンチをA 3 杭まで拡張した。この結果、この平坦部も下部同様耕作土直下が地山となっており、墳丘の施設を想定させるものは見つからなかった。更に段上は、地山直上に堆積土が無い状況となっており、この掘削がそれ程古くないことが明らかになった。

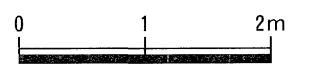
ここで注目するのがトレンチ先端のA 3 杭直下である。この部分でほんの僅かであるが、盛土状の比較的締まった土層を地山直上で検出した。これを受けてトレンチを上部に5 m、A 2 杭まで拡張した。この結果、標高6 9. 6 4 mから上部は盛土で構築されていることが判った。この盛土は、その全てが水平に盛られており、3 トレンチで確認されたものと同様に粘性の強いものや比較的粗いもの、また炭や灰を多く練り込んで強化したものを交互に敷き詰めていったもので非常に堅緻な盛土である。制約上、地山まで掘り下げて広い範囲での調査が不可能であったため、どのような単位で盛土が構築されていたのかまで確認することはできなかった。



- 1 暗茶灰色腐植土
- 2 暗黄灰色土 畑による埋土
- 3 暗黄灰色土 畑による埋土
- 4 暗黄灰色土
- 5 暗黄灰色土 (暗い)
- 6 暗黄灰色土 (やや粗い)
- 7 暗黄灰色土
- 8 暗黄灰色土
- 9 暗灰褐色土
- 10 暗灰褐色土
- 11 暗黄灰色土 (やや淡い)
- 12 暗茶灰色土 (水路埋土?)
- 13 暗灰褐色土 (やや粗い)
- 14 暗黄灰色土
- 15 灰黄色土 (やや暗い)
- 16 灰黄色土 (細かい)
- 17 灰褐色土 (粗い)
- 18 灰褐色粘質土
- 19 灰褐色土
- 20 黄褐色土 (細かい)
- 21 暗黄灰色土 (やや細くて粗質)
- 22 暗灰褐色土 (白い砂粒多く含みよく締まる・地山に近いが置土?)
- 23 黄灰色粘質土 (細かい)
- 24 暗黄灰色土
- 25 暗灰褐色土
- 26 暗灰褐色粘質土
- 27 暗灰褐色粘質土
- 28 茶褐色土 (やや粗いがよくしまる)
- 29 茶褐色粘質土
- 30 茶褐色粘質土 (やや暗い)
- 31 黄褐色土
- 32 暗灰褐色土 (やや粘質)
- 33 灰黄色土 (樹根?)
- 34 灰茶褐色土 (粗い)
- 35 茶褐色土 (粗い)
- 36 暗黄褐色土
- 37 暗灰褐色土 (粗い)
- 38 暗茶褐色土 (粗いがやや粘質)
- 39 暗茶褐色土 (細かい)
- 40 暗灰褐色土
- 41 暗茶褐色土 (粗い)
- 42 暗灰褐色土
- 43 暗灰褐色土 (暗い)
- 44 暗黄灰色土
- 45 暗黄灰色土 (やや暗い)
- 46 茶灰色土 (やや粘質)
- 47 暗黄灰色土
- 48 暗黄褐色土
- 49 暗灰粘質土
- 50 暗黄灰色土 (細くて粘質)
- 51 暗黄灰色土
- 52 暗黄灰色土 (やや細かい)
- 53 暗灰褐色土
- 54 暗灰褐色土
- 55 茶褐色土
- 56 暗灰褐色土
- 57 暗灰褐色土 (粗い) : 地山
- 58 灰黄色土 (粗くて地山っぽい、白い砂粒を多く含みよく締まる) : 置土



第20図 18トレンチ平・断面図(S=1/60)



2. 19トレンチ：後円部南東面（第21図 写真10）

設定の意図：18トレンチの設定と同様に畑地として利用されていた快天山古墳の後円南半部において、墳端及び墳丘構造を解明するための調査区として19トレンチを設定した。これについても地形測量図の検討や現地での検討を踏まえて、比較的残存状況が良好であると考えられるポイントに設定することとした。

設定位置：18トレンチ同様に後円部における墳端及び墳丘構造を確認するための調査区であるので、後円部の南半部、墳端部付近での調査区設定とした。検討の結果、墳丘主軸に対して18トレンチと対象となるよう後円部中心のK10杭から墳丘主軸ラインを南から東に45度振ったラインでの調査区設定とした。

設定箇所は、これまでに検討してきた推定墳端ラインの2m外側から9m内側までの延長1.1mとした。後円部中心のK10杭からは、2.7m～3.8mの位置で、地表標高は67.62m～62.90mの比高4.72mとなった。トレンチ幅は0.8mとしたので面積は8.8㎡となった。

成果：19トレンチの地表形状を大まかに見ると最上部のA23杭付近は、用悪水路が設置されている。そのすぐ下に道がありA25杭を越す辺りまで少し平坦（20度）になる。そこからA28杭までの間が急勾配（26度）になりA28杭からA31杭までが再度平坦（14度）になる。そこで僅かに急勾配（30度）の箇所があり、その後は緩い勾配（8度）で特に変化は見られない。

地山まで掘り下げた結果、現在の地表形状に整形されたのが古くないことがわかった。細かく見ると、A26杭～A30杭間については、腐植土直下が地山で堆積土が皆無の状態であった。A31杭より下部には堆積層が見られるが厚みが30cm前後ある割には分層できないことから、何らかの要因で一気に堆積したものと考えられる。その最下部すなわち地山直上からは瓦器碗が出土しておりそれ以降の遺物は含まれないことから、少なくともこの部位は、中世期以降は旧状が保たれているものと考えられる。この堆積層下の地山形状を観察すると、高さ35cm程度の段が確認できるA32杭を基底部としてA31杭までの区間が26度の勾配を持ちその上部が12度と緩やかになる。この平坦部の途中から地山上部の堆積層が無くなり当時の状況を探ることはできないが、同様の勾配でA28杭まで3m程続く。A28杭からA25杭辺りまでが再び勾配がきつくなり角度で示すと33度ということになる。その上部は、トレンチ東面の土層を見ると勾配が7度と平坦になる。ここで注目するのは、この平坦部に埴輪片を包含する径40cm程度の浅いピットを検出したことである。この辺りは、上述したように用悪水路や道で改変を受けているが、その改変した下部に僅かながら堆積土が残存しており、その下部に包蔵されていたのである。

ピット内の埋土はやや淡い灰黄色土で先に述べた18トレンチで検出した埴輪据付穴の痕跡の可能性を持つ遺構のものと同系統のものである。このことからこの平坦部は墳丘テラス面である可能性が考えられる。本来であればこのまま上部にトレンチを掘り進めばよいのであろうが、A23杭の下にある用悪水路に石材が積み上げられており、これを取り外すことによってその機能が失われることが予想できたので拡張はしなかった。調査中も雨天後には、この辺りで水が多量に染み出てくるという状況であったため一刻も早く現状に復する必要性もあった。

なお、一瞬葺石と思わせる用悪水路に用いられている多量の石材については、安山岩で拳大～やや大きいものがほとんどであり、くびれ部の調査で検出した葺石のものと酷似している。本来的には葺石として使われていたものであると思われる。

この用悪水路で石積みが成されている範囲は、後円部南東部で、後円部を4分の1周程の区間で、西から東へ下る勾配で敷設されている。

3. 20トレンチ：後円部南西面（第22図 写真11）

設定の意図：後円部南西方向に18トレンチを設定したが、墳端付近と想定される箇所巨木がありトレンチを延ばすことが妨げられる状況にあった。しかしながら、当所については墳丘規模を考えるうえで重要なポイントであるため、18トレンチに並行するトレンチを設定し、墳端確認調査を継続する必要性があった。そこで状況を検討した結果、18トレンチの南側に、新たなトレンチを設定することが適当と判断し、調査区を設けた。

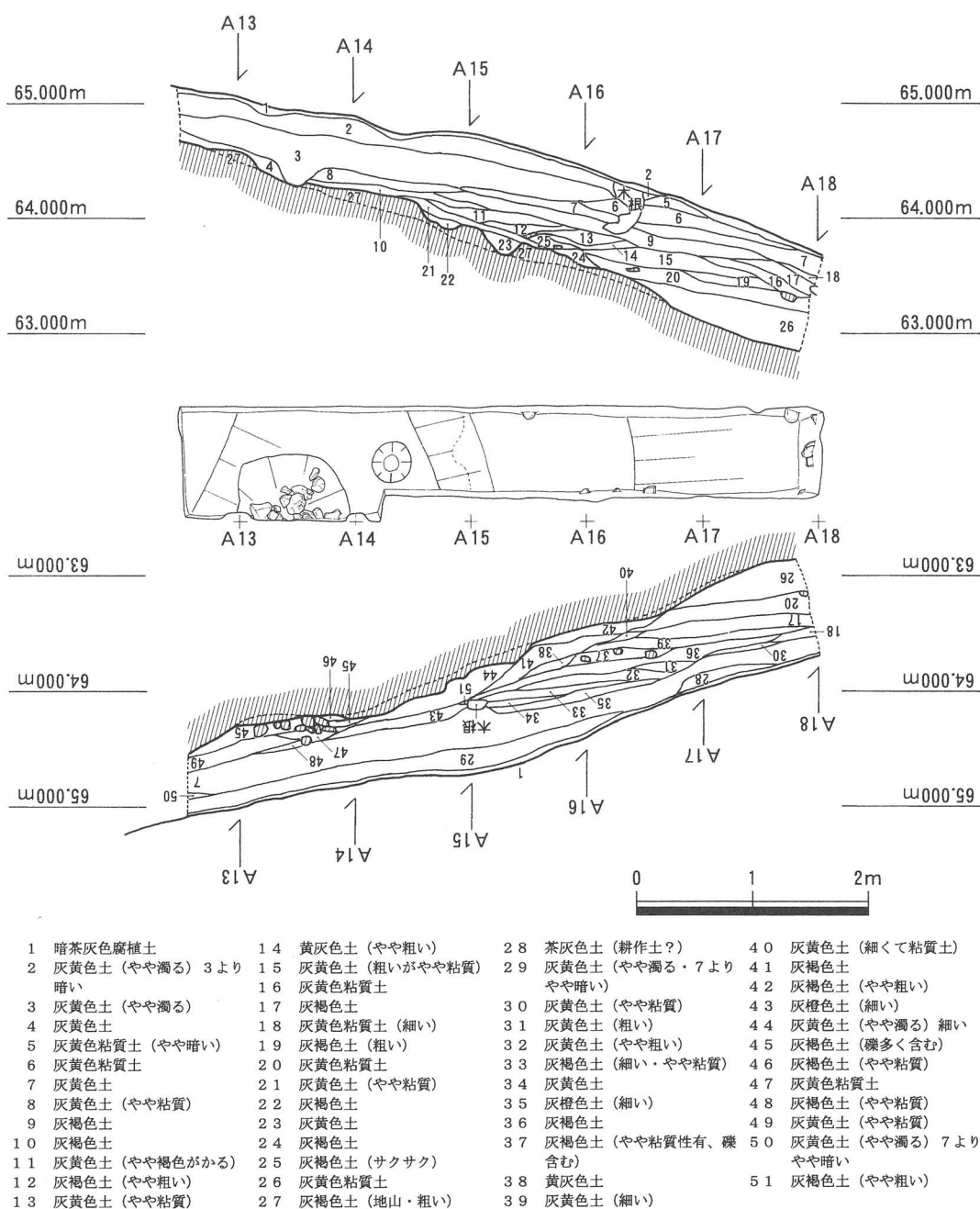
設定位置：18トレンチが、後円部中心K10杭から36mのA14杭で巨木にあたることから、その南側に並行して設定した。A13杭～A14杭間は18トレンチと重なるようにし、A18杭までの5mの延長であったが後に内側に0.5m拡張した。

結果的に後円部中心のK10杭から34.5m～40m、地表標高で65.15m～63.69mの比高1.46mであった。トレンチ幅は、18・19トレンチと同様に0.8mとし、面積は4.8㎡であった。

成果：18トレンチの裾部付近の拡張トレンチとして設定した調査区で、18トレンチの裾部付近と併せた結果として、まず18トレンチA12杭～A13杭間で見られた地山の傾斜変換点が同様にA13杭より上部で見られる。また、この急傾斜になった部分を更に掘削する土壌（SX-01）が確認できた。これは、18トレンチで確認できたものと併せると南北1.5m×東西1.0m程の不定形のもので、中央部付近に集中して拳大の礫が堆積している。その殆どが地山に到達していないことから何らかの要因によって埋土と同時に堆積したものと考えられる。また、18トレンチ側同様、この埋土中には埴輪片も含まれており、堆積している礫も本来葺石として利用されていたものとして考えると、この土壌は快天山古墳以降に作られたものと推察できる。

快天山古墳の施設について明確にできる成果は、他の調査区同様見られないが、トレンチ両側壁及び底面の観察において不定形の浅い落ち込みを確認することができる。遺物が伴わないことから、それが何であるのかの判断はできないが、今回くびれ部で実施した15トレンチで確認できた不定形の浅い落ち込みと類似するものと考え、葺石基底部付近の人頭大よりやや大きめの礫を据え付けるための痕跡と推察することもできる。検討してきた中でもこの地点が後円部墳端付近に該当することについて強く否定することもできないと思われる。

また、このトレンチにおいても出土遺物に集中性が見られる。まず一箇所は、快天山古墳以降に作られたと思われる土壌（SX-01）である。これは礫と一緒に埋土と共に包含されたものと考えられる。もう一箇所は、このトレンチにおける堆積層は前述した浅い落ち込みを挟んで60～70cmから90～100cmへと厚くなるが、その深くなる辺りから各土層が薄く幾重にも堆積を見せる土層のうち、その上半層である。また、平面的な分



第22図 20トレンチ平・断面図 (S=1/60)

布範囲もA15杭～A16杭間に集中している。これは前述した不定形な浅い落ち込み付近ということになり、何らかの関係があるのかも知れない。また、遺物は殆どが円筒埴輪片で葺石に使用されていたと思われる礫も、多量に同層中に含まれる。

第7節 後円部調査区出土遺物の概要

1. 快天山古墳関係遺物 (第23図 写真12)

この調査区では28ℓコンテナで1箱の遺物が出土した。今回調査したくびれ部調査区と比較すると対称的な少なさである。また、その殆どが細片しており原形を留めているも

のは1割にも満たない。また、元位置に残されていたものもなく、流出した後のものであるため接合できるものもなかった。

以下では、数少ない資料のうち18トレンチ5点、19トレンチ1点、20トレンチ1点についての報告をする。

また、直接快天山古墳に関係するものではないが、近世まで各時代を通じてこの土地が利用されてきたことを覗わせる土師質土器片、須恵器片、瓦器片等も少量ではあるが出土している。

壺形埴輪 (第23図5)

18トレンチA11杭～A12杭間の埴輪据付壙(?)直上で出土しており、本墳の出土遺物の大半を占める円筒埴輪片に比べると極端に少ない壺形埴輪片の一つである。二重口縁で頸部及び端部は欠失しており詳細は掴めないが、頸部から強く外反し、強く立ち上がり口縁部に至ると思われる。口縁中間部で径17cm、焼成は良好、色調は淡茶褐色、胎土には0.5～1mm程度の砂粒を含む。また、調整は外面・内面共に横ナデである。

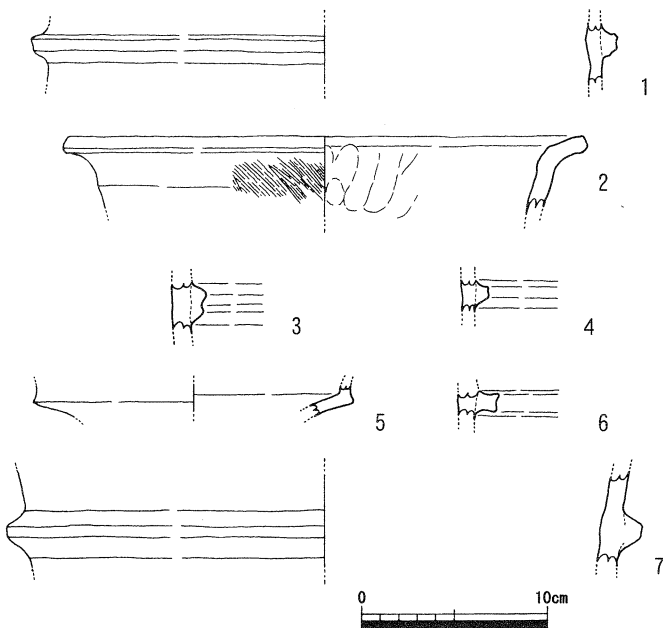
円筒埴輪 (第23図1～4・6・7)

今回の調査で出土した遺物のうち形状を留めているもののほとんどが円筒埴輪の突帯部分であった。

1は、18トレンチA11杭～A12杭間の埴輪据付壙(?)の埋土中に含まれる本トレンチ唯一の遺構に伴う遺物である。

体部で径31.4cmとくびれ部で出土したものと比較すると少々小振りである。焼成は良好、色調は淡橙黄色、胎土には2～4mmの長石を含む。また、調整は外面・内面共に強い横ナデであり突帯取付け時に接着点を内外から強く圧着させているようで突帯上部下部共に円筒部が薄くなっている。

2・3は、でA6杭～A9杭間の置土上で出土している円筒埴輪片である。2は、口縁部で径28cm、焼成は良好、色調は淡茶褐色、胎土には0.5～1mm程度の砂粒や1～2mmの長石を含む。また、調整は、内面は強い縦ナデ、先端部は内外共にナデ整形、湾曲部は縦ハケで、一部横ナデで消されている。体部は縦ハケ後横ナデである。3は、体部で径は不明、焼成は良好、色調は淡茶色、胎土には0.5～1mm程度の砂粒を含む。調整は、内面は摩滅により不明だが外面は横ナデである。



第23図 壺形・円筒埴輪 (S = 1/4)

4は、18トレンチ最下部で検出した土壌上の地表に程近い耕作土からの出土である。耕作

土に含まれることから位置的には元位置から大きく動かされている可能性も否めないが、形状を留める貴重な資料である。円筒埴輪の体部のタガ部分であり、焼成は良好、色調は淡茶褐色、胎土には0.5～1mm程度の砂粒や1～2mmの長石を含む。調整は、1同様に内面・外面共に強い横ナデで突帯接着時に強く圧着させられている。

6は、19トレンチ最下部、A33杭～A34杭間の地山直上で出土した円筒埴輪片体部タガ部分である。地山直上ということから、最も近接する施設（テラス面・円筒埴輪列）からの流入と考えられる。焼成は良好、色調は淡橙色、胎土には0.5～1mm程度の砂粒を含む。調整は、内面は残存部分が非常に少なく不明であるが、外面は18トレンチの遺物と同様に突帯の上下部共に体部に接合する際の、強い横ナデとなっている。

7は20トレンチA13杭～A14杭間の土壌（SX-01）の石溜中に同胞されていた円筒埴輪体部で残存部分で径3.4cmである。焼成は良好、色調は淡灰黄色、胎土には0.5～3mm程度の砂粒を多く含む。調整は、内面・外面共に摩滅が激しく不明である。

第8節 まとめ

1. 快天山古墳の規模について

墳丘主軸長の復元

前方部前端位置は、これまでのところ昨年度調査の7トレンチで確認した区画溝が最も重要な手がかりとなる。ただし上部が削平されているため、区画溝を墳丘外の施設と位置づけた場合、正確な墳端位置を確認することはできない。区画溝南肩の上端を計測点とすれば98.4mとなるが区画溝南肩の下端を計測点とすれば98.8mとなる。一応、前端部も墳丘が残存しているという考えのもと、98.8mを採用したい。

一方、後円部後端位置は、同南斜面の改変が著しく三カ年の調査でも確定することは難しかった。したがって各トレンチで観察した傾斜変換点と現状の地表面観察の所見を総合して推測せざるを得ない。この場合、とりあえず今のところは主軸ライン上に設定した4トレンチの所見を重視しておきたい。

また、現地表面の観察によれば、後円部墳丘南半の裾部に低基壇が取り付く可能性を全く否定することはできない。この推測が妥当であれば、後円部後端位置はさらに外方を想定しなければならないが、現状では確証を挙げることは難しい。詳細は今後の委ねるとして、今回は上記した理解に拠っておきたい。

なお、今回の再検討で昨年度概報の推測値が基準杭間の数値を誤認したものであったことを確認した。前回、誤った数値を提示したことをお詫びして、ここで撤回しておきたい。

後円部径の復元

多分に自然地形を利用した墳丘構築のため、また裾部の改変・崩壊により、これまでの調査から各部の詳細な値を導き出すことは至難であるが、測量調査から推測した墳丘中心点から後円部端各部までの推測値を示しておく。南面は4トレンチの傾斜変換点までの直線距離37.2m、標高は64.5mで墳頂との比高は10.8mとなる。西面では一昨年度調査の3トレンチ所見では直線距離31.2m、標高65mで比高10.3mとなる。また、今年度調査した後円部南西部に設定した18・20トレンチの成果を鼻屑目に見ると、直線距離37.2m、標高は63.8mで比高11.5mとなる。墳丘主軸に対して

対称に設定した19トレンチの成果も最目に見ると、直線距離3.6m、標高は63.9mで比高11.4mとなる。ただし昨年度の前部東面各調査区などで確認した墳端構造とやや相違する面もあり、後部の墳端位置についても今後の再調査や再検討が必要と考えるので、上記した数値はあくまで暫定的な目安と位置づける程度にとどめるのが妥当である。

前方部長の復元

西面では15トレンチ所見で示したように、該当箇所がすでに損壊している可能性が高い。東面11～13トレンチ所見では、墳端くびれ部位置は後部中心点の南2.6m、墳丘主軸から15.2mとなる。これにしたがって前方部長を復元すれば35.6mとなる。

前方部幅の復元

測量調査から推測した墳丘主軸ラインに依拠して、前方部各部幅の推測値を示しておく。くびれ部では第三段斜面基底位置を15・16トレンチで推測したが、すでに述べたように墳丘主軸ラインに対して整合的であった。くびれ部第三段斜面基底部の幅は22mとなる。2・13トレンチで得られたくびれ部に接近した位置の第二段斜面基底幅は27.3～27.4mとなる。11・13トレンチで検出した東面データからくびれ部最下段幅を推測すれば30.4mとなる。また前方部前半の西面に位置する14トレンチ所見から推測すれば基底部幅は32.8m、第二段幅は28.8～28.9mとなり、前端に向かってわずかに広がる可能性がある。

2. 墳丘外表施設の状況

段築

前方部墳丘の両側面では、東西両面共に上下二段のテラス面を挟む三段築成を確認している。ただし第二・第三段斜面が各々1m強、3m弱の高さを復元できるのに対して第一段高は0.5m前後と極端に低い。この差を重視すれば通常の三段築成と見なすよりも、二段築成の墳丘裾に低基壇が取り付くと理解すべきかもしれない。前方部前端区画溝のレベルから考えて、側面のテラス面は前面にめぐらない可能性が高い。

また、後部墳丘の段築は、以前として不詳であるが、今回調査ではくびれ部の部分的な所見ながら、前回所見と合わせれば、前方部側面の上下テラス共に後部に接続することを想定できる。

また各テラス標高がくびれ部から前方部前端に向かってわずかにせり上がる傾向にあることは、地形的な制約、あるいは前期前半段階の墳丘形態との関連双方の可能性に留意しつつ注意しておくべきだろう。

葺石

用材、配列方式はこれまで見たように地点ごとに相当の差異を含む。これまで前方部西面の2・14トレンチで比較的大型石材を用い相対的に整った配列を確認したため、より眺望に秀でた墳丘西側面の葺石が充実する可能性を考慮したが、今回の15トレンチ所見を重視すればこの見通しは再検討が必要となる。

部分的な確認の為、未だ確証は得られないが、今回調査でも後部墳丘、特に上半部における葺石の充実度に疑問を投げかける結果となった。また両くびれ部に設定した15・

16 トレンチ、また、改変を受けているため簡単に比較はできないが後円部に設定した18・19・20 トレンチ共に、後円部側葺石が完全に脱落していた点は興味深い。部位による葺石施工法の差異を示唆するものかもしれない。

埴輪配列

今年度調査では埴輪配列に関する新たな知見を得ることは少なかった。ただし両くびれ部推定上段テラスに流入・堆積した埴輪片の豊富さから、墳頂部を含めた後円部墳丘上位に埴輪列が存在することを間接的ながら推測し得るであろう。

3. 快天山古墳の築造時期

快天山古墳の築造時期は、これまで石棺型式と副葬品組成から古墳時代前期中葉後半（前方後円墳集成編年3期）に比定されてきた。一昨年度以来の確認調査では主に出土埴輪の型式および編年から従来の所見との対比を試みてきた。本地域の古墳時代前期円筒埴輪の様相は必ずしも詳らかではなく、この点厳密な検証は今後の課題とせざるを得ないが、少なくとも今年度調査資料を加味しても、出土埴輪の検討から石棺・副葬品組成から推測された時期観と矛盾する点はない。したがって従来の所見にしたがって本古墳の築造時期を前方後円墳編年3期と推測しておきたい。



図版1 推定第二段テラス遺物出土状態（西から）



図版2 推定第二段テラス遺物出土状態（東から）



図版3 第二段テラス遺物出土状態（西から）



図版4 第三段斜面葺石遺存状態（西から）



図版5 第二段斜面葺石（西から）



図版6 第二段斜面葺石と基底石堀方？



図版7 第二段斜面葺石（南から）

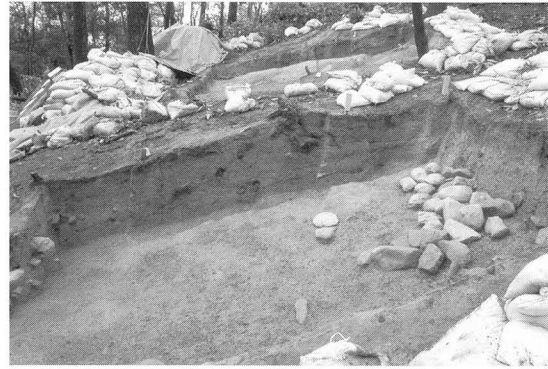


図版8 第二段斜面葺石（上から）

写真1 15トレンチ



図版 9 第三段斜面葺石残存状況（東から）



図版 10 第三段斜面葺石（北から）



図版 11 第三段斜面葺石（東から）



図版 12 第三段斜面葺石（南から）



図版 13 推定第二段テラス遺物出土状況（東から）



図版 14 第二段テラス遺物出土状況（西から）



図版 15 第二段テラス遺物出土状況（東から）



図版 16 第二段テラス遺物出土状況（南から）

写真 2 16 トレンチ



図版 17 17トレンチ全景（東から）



図版 18 17トレンチ南壁土層全景（北東から）



図版 19 南壁土層：中央部（北から）



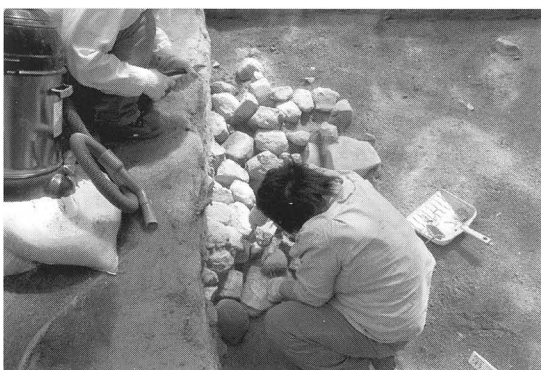
図版 20 南壁土層：西部（北から）



図版 21 南壁土層：東部（北から）



図版 22 17トレンチ遺物検出作業



図版 23 17トレンチ葺石実測作業

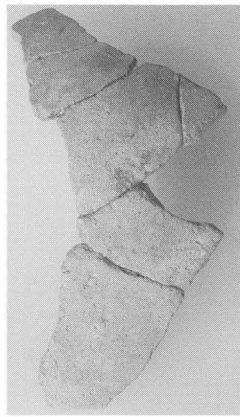


図版 24 調査説明会風景

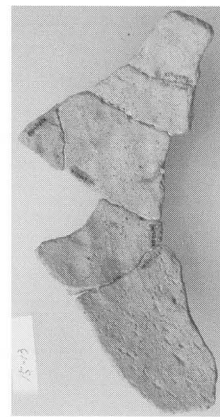
写真 3 17トレンチおよび調査風景



図版 2 5 壺形埴輪 (第 8 図-1)



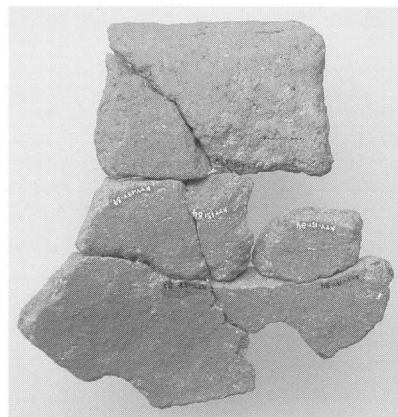
図版 2 6
壺形埴輪 (第 8 図-2) 表



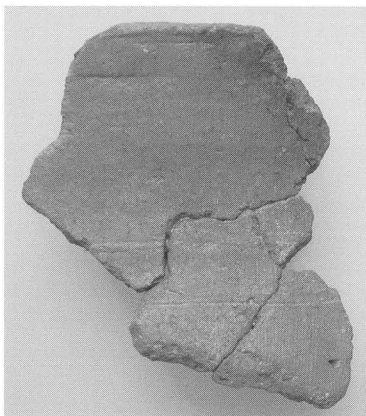
図版 2 7
壺形埴輪 (第 8 図-2) 裏



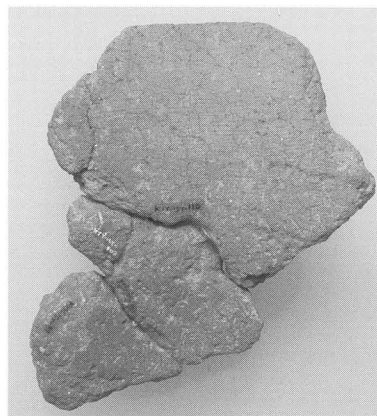
図版 2 8 円筒埴輪口縁部 (第 9 図-2) 表



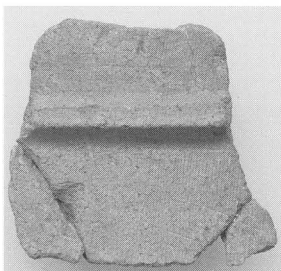
図版 2 9 円筒埴輪口縁部 (第 9 図-2) 裏



図版 3 0 円筒埴輪口縁部 (第 9 図-5) 表



図版 3 1 円筒埴輪口縁部 (第 9 図-5) 裏

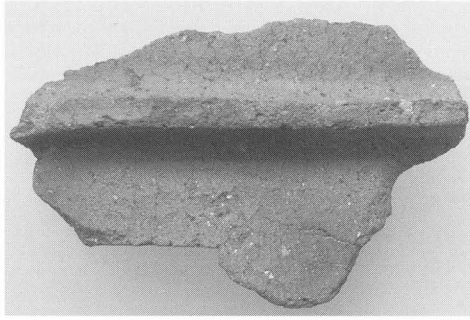


図版 3 2 円筒埴輪中位 (第 1 2 図-2) 表



図版 3 3 円筒埴輪中位 (第 1 2 図-2) 裏

写真 4 15 トレンチ出土埴輪



図版34 円筒埴輪中位(第13図-1)表



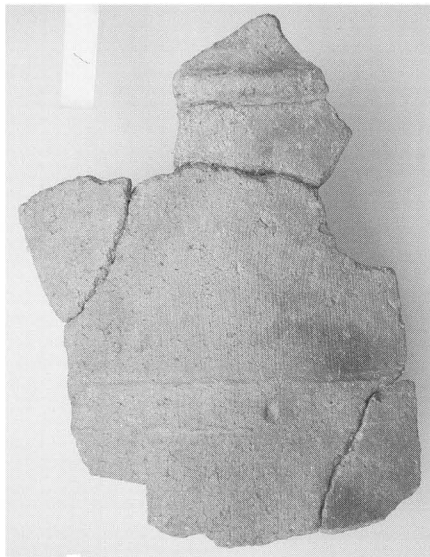
図版35 円筒埴輪中位(第13図-1)裏



図版36 円筒埴輪中位(第11図-3)表



図版37 円筒埴輪中位(第11図-3)裏



図版38 円筒埴輪中位(第12図-4)表



図版39 円筒埴輪中位(第12図-4)裏

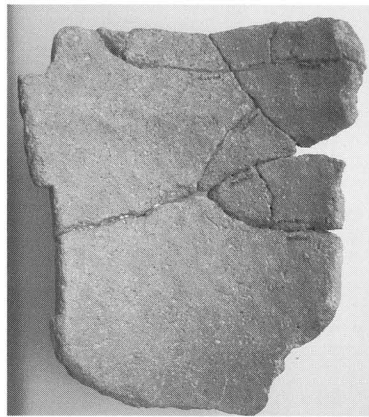


図版40 円筒埴輪中位(第12図-4)拡大

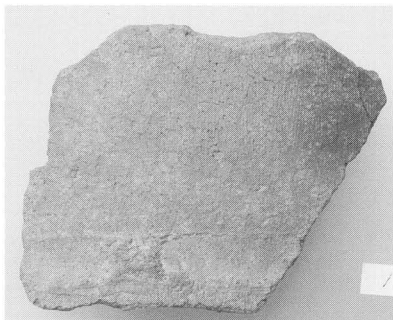
写真5 15トレンチ出土埴輪2



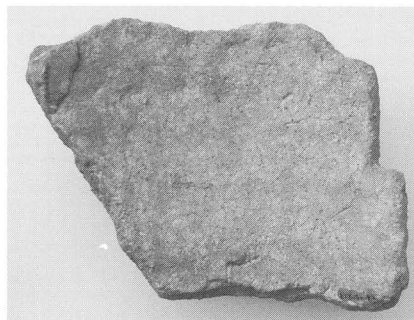
図版 4 1 円筒埴輪中位 (第 10 図-4) 表



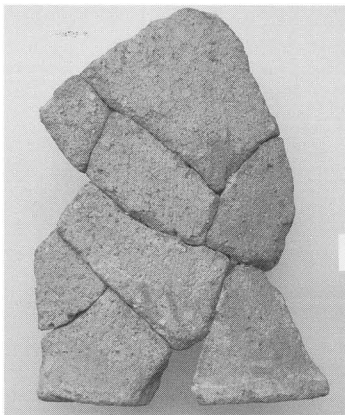
図版 4 2 円筒埴輪中位 (第 10 図-4) 裏



図版 4 3 円筒埴輪中位表



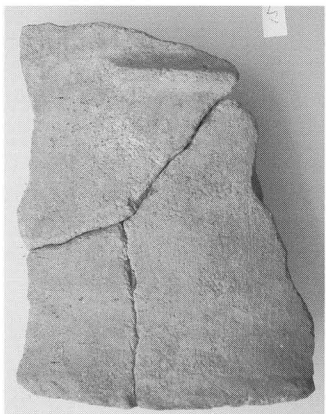
図版 4 4 円筒埴輪中位裏



図版 4 5 円筒埴輪基底部 (第 14 図-1) 表



図版 4 6 円筒埴輪基底部 (第 14 図-1) 裏

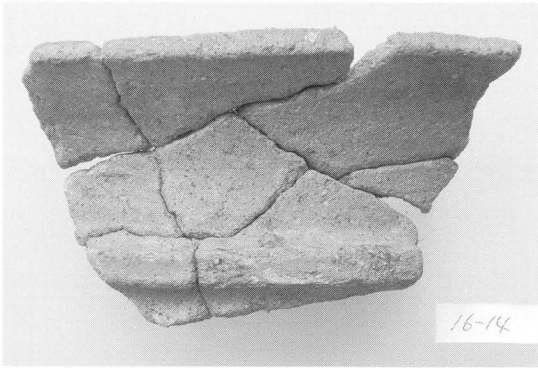


図版 4 7 円筒埴輪基底部 (第 14 図-4) 表



図版 4 8 円筒埴輪基底部 (第 14 図-4) 裏

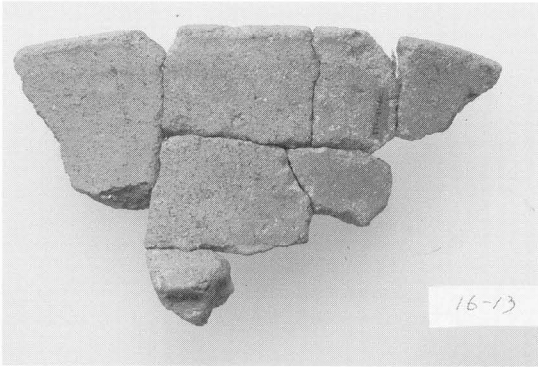
写真 6 15 トレンチ出土埴輪 3



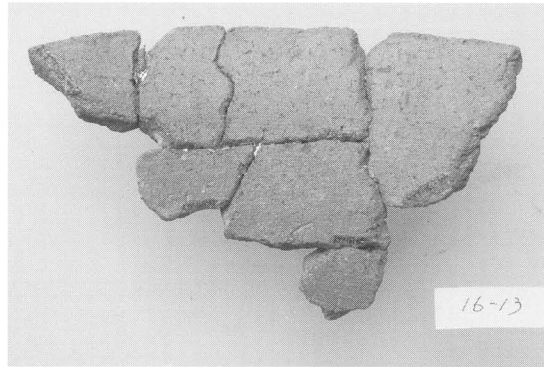
図版49 円筒埴輪口縁部（第9図-1）表



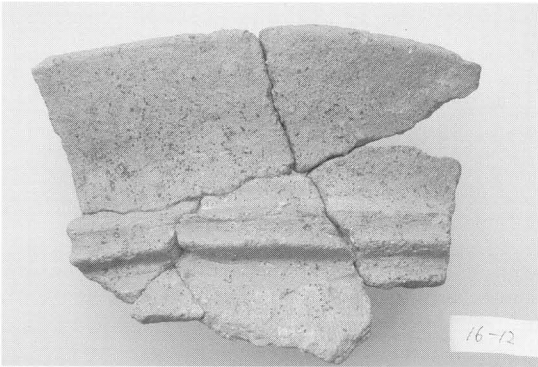
図版50 円筒埴輪口縁部（第9図-1）裏



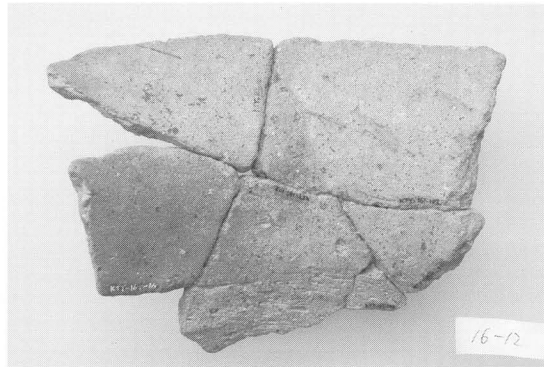
図版51 円筒埴輪口縁部（第9図-3）表



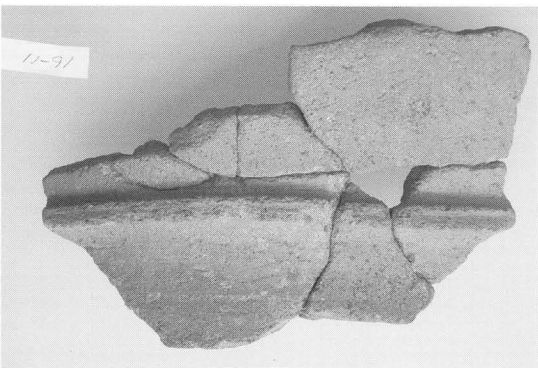
図版52 円筒埴輪口縁部（第9図-3）裏



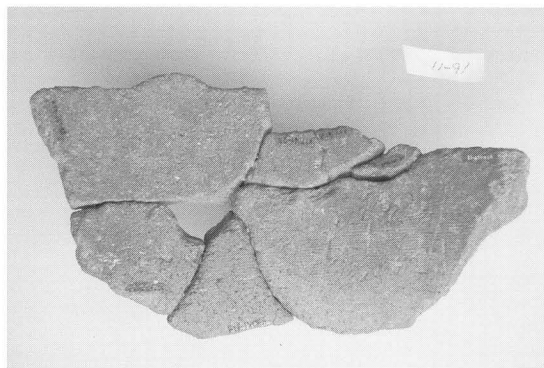
図版53 円筒埴輪口縁部（第9図-4）表



図版54 円筒埴輪口縁部（第9図-4）裏



図版55 円筒埴輪口縁部（第9図-6）表

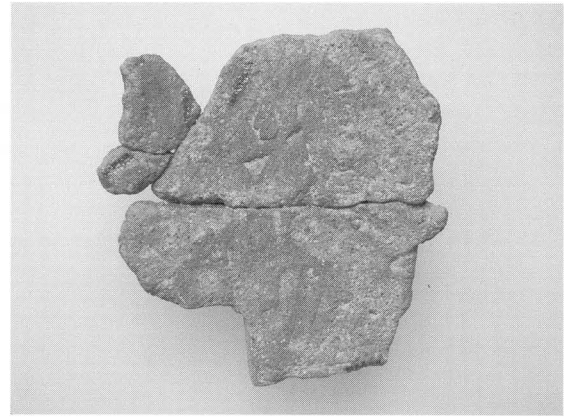


図版56 円筒埴輪口縁部（第9図-6）裏

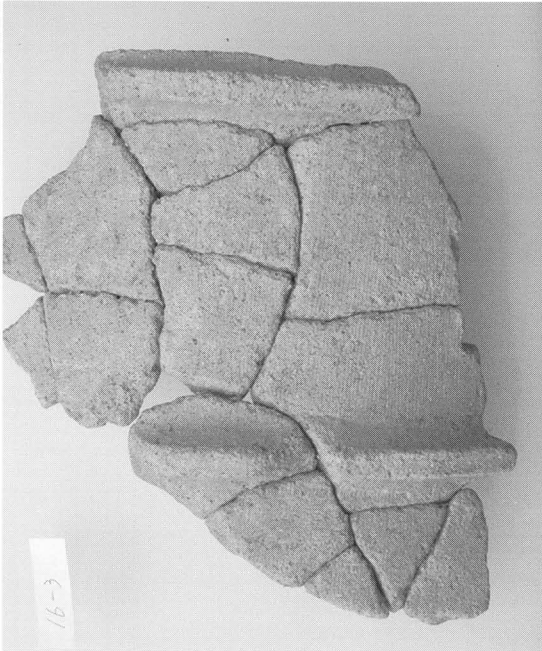
写真7 16トレンチ出土埴輪1



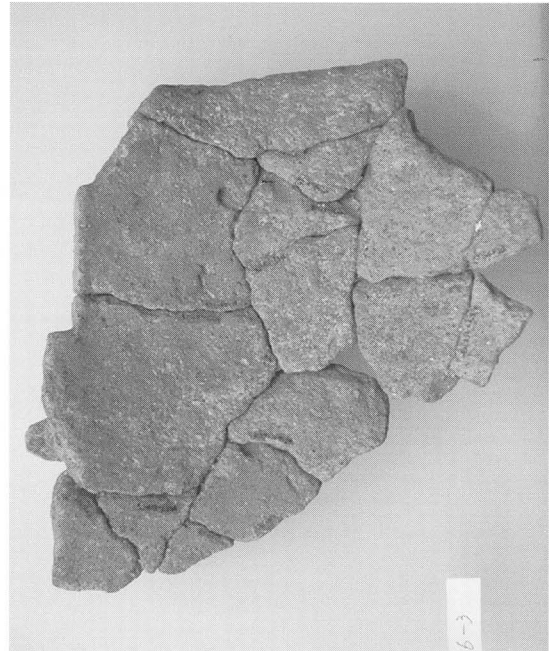
図版 57 円筒埴輪中位 (第 10 図-3) 表



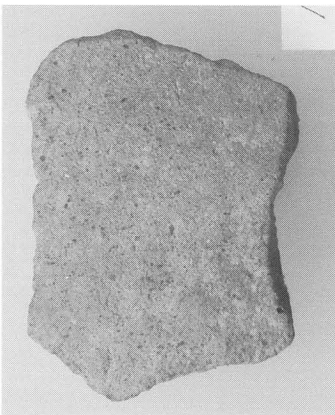
図版 58 円筒埴輪中位 (第 10 図-3) 裏



図版 59 円筒埴輪中位 (第 11 図-4) 表



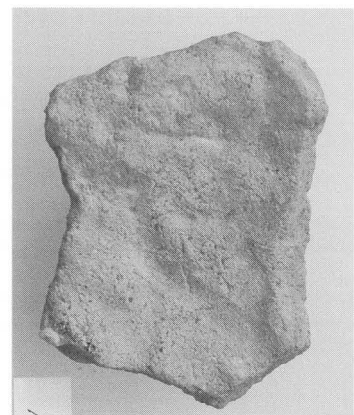
図版 60 円筒埴輪中位 (第 11 図-4) 裏



図版 61
壺形埴輪底部：
穿孔部 (第 8 図-5) 表

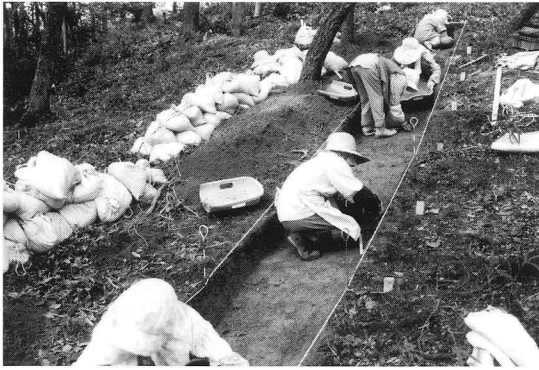


図版 62
壺形埴輪底部：
穿孔部 (第 8 図-5) 断面



図版 63
壺形埴輪底部：
穿孔部 (第 8 図-5) 裏

写真 8 16 トレンチ出土埴輪 2



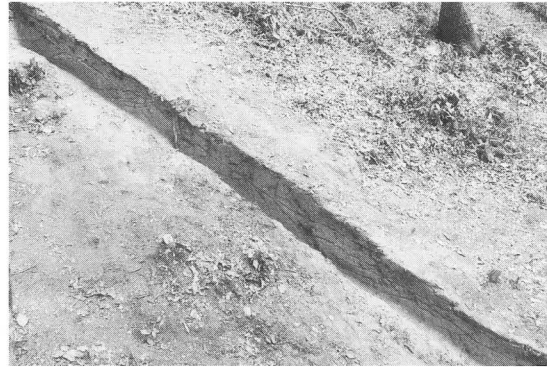
図版 6 4 作業風景



図版 6 5 置土検出状況（北西から）



図版 6 6 置土検出状況（西から）



図版 6 7 盛土確認状況（西から）



図版 6 8 盛土確認状況（北西から）



図版 6 9 盛土検出状況（西から）



図版 7 0 埴輪据付壙？検出状況（南西から）



図版 7 1 土壙検出状況（北西から）

写真 9 18 トレンチ



図版 7 2 墳端付近から墳頂を望む（南東から）



図版 7 3 トレンチ全景（北東から）



図版 7 4 トレンチ全景（東から）



図版 7 5 推定テラス付近確認状況（南から）



図版 7 6 埴輪据付墳？検出状況（南から）

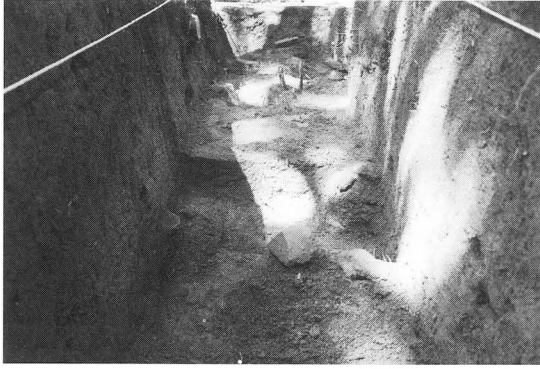


図版 7 7 埴輪据付墳？間掘状況（南から）



図版 7 8 埴輪据付墳？検出状況（南西から）

写真 1 0 1 9 トレンチ



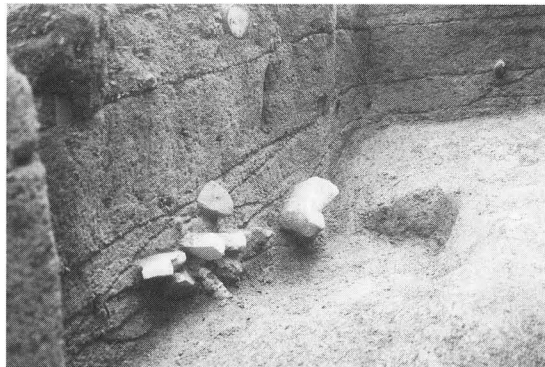
図版 7 9 出土遺物検出状況（北東から）



図版 8 0 礫等堆積状況（北東から）



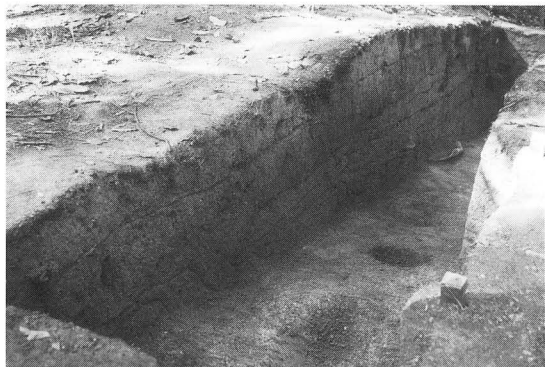
図版 8 1 土壌検出状況（南東から）



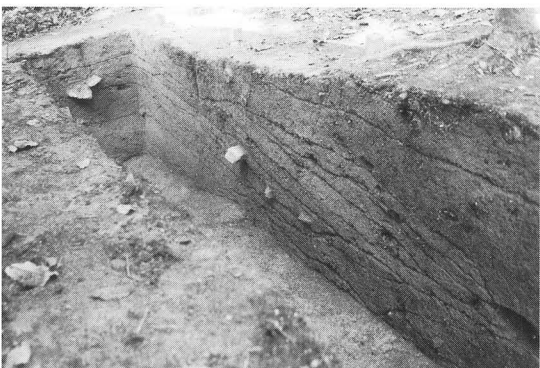
図版 8 2 土壌堆積状況（南から）



図版 8 3 南東壁土層堆積状況（西から）



図版 8 4 南東壁土層堆積状況（北から）

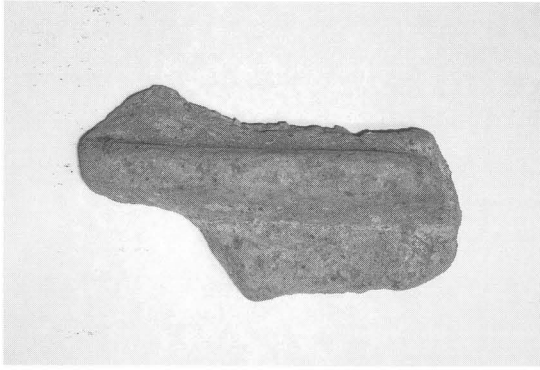


図版 8 5 北西壁土層堆積状況（東から）



図版 8 6 北西壁土層堆積状況（南から）

写真 1 1 2 0 トレンチ



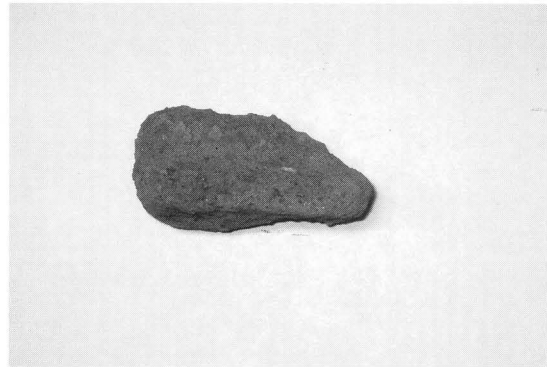
図版 87 18 トレンチ円筒埴輪中位 (第 23 図-1)



図版 88 18 トレンチ円筒埴輪口縁部 (第 23 図-2)



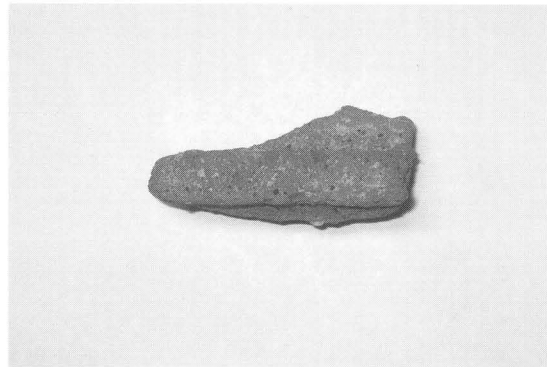
図版 89 18 トレンチ円筒埴輪中位 (第 23 図-3)



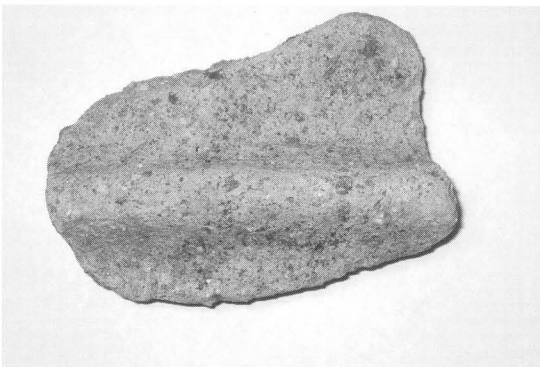
図版 90 18 トレンチ円筒埴輪中位 (第 23 図-4)



図版 91 18 トレンチ壺形埴輪口縁部 (第 23 図-5)



図版 92 19 トレンチ円筒埴輪中位 (第 23 図-6)



図版 93 20 トレンチ円筒埴輪中位 (第 23 図-7)

写真 12 各トレンチ出土埴輪

第Ⅲ章 ま と め

綾歌町では、平成8年度から国庫及び県費補助事業により綾歌町内遺跡発掘調査事業を実施しており、今年度についても継続して実施することになった。

今年度については、栗熊東字若狭地区快天山古墳を対象に調査を実施した。

快天山古墳は、昭和25年(1950)香川県教育委員会によって主体部を中心とした発掘調査が実施されており、その内容は、『史跡名勝天然記念物調査報告 第十五 快天山古墳発掘調査報告書』(1951)で報告されている。

さらに、翌26年京都大学考古学教室によって再調査が実施され、その内容は『岩崎山第4号古墳・快天山古墳発掘調査報告書』(2002)で報告されている。

今年度の調査は、東西両くびれ部の状況確認、また、後円部の規模・構造を含む状況確認を目的としており、計6本の試掘トレンチによる墳丘確認調査を実施した。各トレンチ共に平面配置、土層断面及び包含遺物による遺構分布確認調査を行った。

この結果、西側くびれ部では第2段テラス面及び第3段斜面の葺石を検出し、くびれ屈曲点も確認することができた。東側くびれ部の調査でも前方部第3段斜面の葺石が検出され後円部に向かって屈曲する地形を捉えることができた。また、この調査によって前方部と後円部で葺石の残存状況に極端な差異が見られることが判った。この点については、比較的残存状況の良い前方部側面の葺石においても部位により構築方法や使用石材に差異が見られることから今後の更なる検討が必要である。

後円部北東部側面に設定したトレンチでは、期待していた後円部四段成の状況は確認することができなかった。しかし、後円部に程近い部分で昨年度の3トレンチ上半部で確認したものと同様の盛土が確認できた。この盛土は、複数の土を組み合わせで堅緻に築き上げられている。また同様の盛土は、後円部南西斜面に設定したトレンチの上半部でも確認することができた。このことにより、丘陵先端に立地する快天山古墳は、基本的には地山削り出しにより形状が整えられているが、後円部上半部や不足する箇所には高水準の盛土が施されていることが判明した。

また、後円部南半部東西斜面に設定したトレンチでは、畑地への改変等によって旧状を確認することができなかったが、部分的に外表施設の痕跡と思わせるものが確認できた。円筒埴輪の据付壇や葺石の据付壇の痕跡がそれで、樹立した状態のものが無いことから断定はできないが、堆積層中等に葺石に使用されていたと考えられる礫や埴輪片が多く含まれていることから考えてもくびれ部付近に類似する施設は整備されていたものと考えてよいであろう。

今年度の調査で、平成13年度から継続して実施してきた、快天山古墳の分布及び構造を確認するための調査は終了する。この成果をもとに、更に検討を重ねて今後の早期の整備を目指したい。

同事業については、次年度以降についても継続的に実施し、本町に埋蔵される重要な遺跡についての調査研究を続けていきたい。また、遺跡の調査によって得られる資料の整備を行うとともに、保護・活用に向けた体制強化を進めていきたい。

また、今後の開発についても、これらの調査成果に基づき的確な遺跡の保護についての、提示をするとともに、事前協議を進めていき、文化財行政の活用・保護についての貴重な資料となるべく努めたい。

報告書抄録

ふりがな	あやうたちょうないいせき はつくつちょうさ ほうこくしょ							
書名	綾歌町内遺跡発掘調査報告書							
副書名	平成15年度国庫補助事業報告書							
巻次	2004.3	シリーズ名	綾歌町内遺跡発掘調査報告書	シリーズ番号	第8集			
編集者名	綾歌町教育委員会 主任主事 近藤 武司							
編集機関	綾歌町教育委員会							
所在地	〒761-2492 香川県綾歌郡綾歌町栗熊西1638番地 TEL0877-86-5963							
発行年月日	2004年3月31日							
頁数	例言・目次等	本文	挿図	表	図版	総頁		
	8頁	55頁	23枚	1枚	93枚	63頁		
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° / ' "	° / ' "			
かいてんやまこふん 快天山古墳	綾歌町 栗熊東字若狭 807-1 915 916-1 917 920-2 920-4 920-5 富熊字畑田 2151	37384	00003	34度 13分 57秒	133度 53分 30秒	2003.6.23 ～ 2003.8.31	79.4 m ² 15Tr 27.0 m ² 16Tr 12.0 m ² 17Tr 12.0 m ² 18Tr 14.8 m ² 19Tr 8.8 m ² 20Tr 4.8 m ²	遺跡分布調査 遺構確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
かいてんやまこふん 快天山古墳	古墳	古墳時代前期		墳丘 割竹形石棺 葺石 テラス 円筒埴輪列		円筒埴輪片 壺形埴輪片 須恵器片 石斧片 八稜鏡 瓦器片	段築 地山削出・盛土併用	

平成15年度国庫補助事業報告書
綾歌町内遺跡発掘調査報告書

平成16年3月31日

編集・発行 綾歌町教育委員会

綾歌郡綾歌町栗熊西1638

電話(0877)86-5963

印刷 四国工業写真(株)